

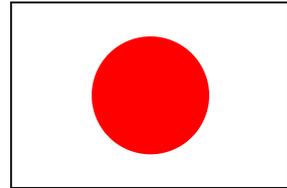
令和7年度

台東区中学生海外短期留学派遣

Taito Study Tour Report



報告書



令和7年（2025年）8月5日（火）～8月14日（木）

August 5 (Tue) ~ August 14 (Thr), 2025



令和7年8月6日（水）シドニー市内にて

台東区教育委員会

Taito Board of Education

## 《 目 次 》

あいさつ	1
台東区教育委員会 教育長 佐藤 徳久	
令和7年度 派遣団員名簿	2
令和7年度 海外派遣日程	3
海外派遣研修報告	4
海外派遣を終えて	14
派遣団長より	34
台東区立上野中学校 校長 矢部 直意	
引率者より	35
台東区立柏葉中学校 主任教諭 島田 裕也	
台東区立桜橋中学校 教諭 天谷 優里	
台東区立上野中学校 教諭 多久 優麗花	
台東区教育委員会 指導主事 山田 智裕	
あとがき	37
台東区教育委員会 指導課長 宮脇 隆	

## あ い さ つ

台東区教育委員会教育長 佐藤 徳久

令和7年度台東区中学生海外短期留学派遣が関係する多くの皆様の御支援と御協力により、大きな成果を得て、無事に終えることができました。8月5日（火）から8月14日（木）にかけてオーストラリア・シドニー市、ノーザンビーチ市にて中学生海外短期留学派遣を10日間、実施いたしました。生徒の研修成果をまとめた報告書の刊行に当たり、御挨拶申し上げます。

2024年の訪日外客数は、約3700万人で、年間過去最高を更新しました。台東区にも浅草をはじめ下町風情の残る谷中エリア、アメ横商店街のある御徒町、上野恩賜公園や上野動物園など多くの観光地を有する本区にも多くの外国人観光客が訪れています。台東区教育委員会では、未来を担う子供たちに日本や他国の文化・伝統を学び、理解するとともに、互いの人間性や価値観などを尊重する態度を育てていくことが重要であると考えております。そのような中で、区立中学生を海外に派遣し、海外における生活や学習及び相互交流などを通して豊かな人間性を培い、国際社会において尊敬と信頼の得られる区民の育成を目指すことをねらいとし、本事業を実施しております。

派遣生徒は、6月21日（土）の結団式・オリエンテーションから始まる8回の事前学習においてオーストラリアの歴史や文化等について調べたり、ALTとの英会話、現地の学校での歓迎会やフェアウェルパーティーで披露する歌や踊りの練習に励んだり、準備を進めてきました。

オーストラリアでは、現地の学校に4日間通い、土日を含む6日間をホストファミリーと過ごしました。学校の御厚意により一人の派遣生徒に対して、ピットウォーターハイスクールの生徒がバディという形で一人付きました。学校生活を一緒に過ごすだけでなくバディの家にホームステイをし、寝食を一緒に過ごすことで、バディとの仲もより深めることができました。

また、帰国後には、現地の学校でバディを引き受けてくれた生徒がご家族と来日し、上野中学校の生徒と交流する機会がありました。このような相互の交流が、国境を越えた友情の芽生えにつながっていることにも大変嬉しく思います。

本研修を通して生徒は、国境を越えて新たな友人を作り、共に学び、成長してきました。オーストラリアの地で、自分で見聞きし、触れ、味わいながら、人と人がつながる直接的な体験から得られた学びは、他には代えがたい価値があります。現地で出会った人々や派遣生の仲間など、事業を通して出会った多くの他者と、かかわり合い、支え合い、学び合う中で、様々な違いを受け入れ、受け入れられた経験は、グローバル化が進展する社会において、一人一人が自分らしく生きていく力として発揮されるものと確信しています。

最後に本事業を実施するにあたり、御理解、御協力をいただきましたオーストラリア・ニューサウスウェールズ州シドニー市、ノーザンビーチ市をはじめ、関係する多くの皆様に感謝申し上げます。

# 令和7年度 派遣団名簿

## 1 派遣生徒

学 校 名	氏 名
御徒町台東中学校	長谷川 來実
御徒町台東中学校	濱田 東摩
柏葉中学校	五十嵐 ひまり
柏葉中学校	吉田 芽生
上野中学校	安立 もい
上野中学校	成田 瑞葵
上野中学校	保坂 旭宏
上野中学校	山木 はる
上野中学校	山田 杏
忍岡中学校	久保田 衣悠
忍岡中学校	篠原 諒
浅草中学校	間 大 眞
浅草中学校	村松 璃亜
桜橋中学校	五十嵐 七海
桜橋中学校	久保 叶多
桜橋中学校	高橋 あぐみ
桜橋中学校	達 彩 葉
桜橋中学校	長谷川 晃之助
駒形中学校	江端 一 翔
駒形中学校	神吉 陸 杜

## 2 引率者

	学 校 名 職 名	氏 名
団 長	上野中学校 校 長	矢 部 直 意
団 員	柏葉中学校 主任教諭	島 田 裕 也
団 員	桜橋中学校 教 諭	天 谷 優 里
団 員	上野中学校 教 諭	多 久 優 麗 花
事務局	教育委員会 指導主事	山 田 智 裕

# 海外派遣日程

- 1 派遣先 オーストラリア連邦 ニューサウスウェールズ州  
シドニー市、ノーザンビーチ市（姉妹都市）

- 2 海外派遣関係日程（事前・事後研修含む）

海外派遣期間：令和7年8月5日（火）～8月14日（木）〔9泊10日〕

事前研修	結 団 式		6月21日（土）	午後2時から	
	研 修		8回実施（6月～8月）		
海外派遣期間		日 付	日 程		宿 泊
	1	8月5日 （火）	午後 6時 午後10時	羽田空港集合 出発式 羽田空港発	機内泊
	2	8月6日 （水）	午前5時半 終 日	シドニー国際空港着 ムルディアガアポリジニ文化センター視察	ホテル泊
	3	8月7日 （木）	午前 9時 午後 2時30分	Pittwater High School との交流 （歓迎会・授業体験） ホストファミリーとの対面	ホームステイ
	4	8月8日 （金）	終 日	Pittwater High School での授業体験	ホームステイ
	5	8月9日 （土）	終 日	ホストファミリーとの交流	ホームステイ
	6	8月10日 （日）	終 日	ホストファミリーとの交流	ホームステイ
	7	8月11日 （月）	終 日	Pittwater High School での授業体験	ホームステイ
	8	8月12日 （火）	終 日	Pittwater High School との交流 （授業体験・フェアウェルパーティ）	ホテル泊
	9	8月13日 （水）	終 日 午後 6時 午後 9時	シドニー市内視察 シドニー国際空港着 シドニー国際空港発	機内泊
10	8月14日 （木）	午前 5時30分	羽田空港着 解散式	—	
事後研修	拠点校研修		3回実施（8月）		
	解団式・報告会		10月2日（木）	午後4時から午後5時まで	

## <結団式・オリエンテーション・事前学習>

上野中学校 保坂 旭宏  
駒形中学校 江端 一翔

事前学習では、この海外派遣を楽しく、より一層理解を深めることができるようオーストラリアの歴史、日本との関係、観光地などを調べ、スライドにまとめました。

オーストラリアの歴史・地理や、アボリジニ・スポーツ・ニューサウスウェールズ州との関係について調べました。ALTの先生方に来てもらい学習を行いました。授業では、自己紹介や日常会話などを教えてもらいました。また、イギリス英語や普段使っている英単語がオーストラリアでは異なる英単語になるということを教えてもらいました。異なる英単語をただ普通に教えてもらうだけでなく、クイズを使って分かりやすく、そして楽しく教えてもらいました。また、教えてもらった英単語は、現地で多くの人と話すときにとっても役に立ちました。英語が苦手でもわかりやすく、楽しく自信をつけてもらえる授業をしてもらいました。そのおかげで現地のお店などで会話をスムーズに行うことができました。

ソーラン節は、小学校以来で振付が全く分からないような状態から始まり、小学生の頃のような姿や体ではなかったため思うように体を動かさずその日は全身が筋肉痛になりました。ソーラン節の練習では、ただ踊りを覚えるだけではなく、表現の仕方や一体感、また掛け声の大きさなどを細かくきれいに揃え、Pittwater High Schoolの生徒たちに気持ちが伝わるようなものにするため、何度も練習を繰り返してきました。法被が配られ、着用しての最後の練習では雰囲気是一段と変わり演技の見栄えが良くなり、フェアウェルパーティーでお世話になった方々に見られても恥ずかしくない演技までに仕上げることができました。現地の人にオーストラリアの気候や物価などを教えてもらえる貴重な時間をいただき、そこではオーストラリアの文化アボリジニのことや人口・使用している言語、現地に行って気を付けること、お土産や必要な荷物などを教えてもらいました。



<出発式からオーストラリアの空港を経てホテル到着まで >

柏葉中学校 吉田 芽生

不安や緊張といった様々な感情が伝わってくる中での出発式で私は、代表生徒の言葉を自分と照らし合わせて聞くことを心掛けました。そのため同じように頑張りたいという意志と同時に台東区と日本の代表としてオーストラリアへ行く責任をもって行動しようと思えました。

長い機内での時間が終わり飛行機を降りると、景色からは想像できないような寒さと強風で驚きました。そこからバスに乗りシドニー市内を観光していると、ヨーロッパのような街並みを感じることができました。現地のガイドさんが、昔オーストラリアがイギリス領だったことに関係があると教えてくださいました。そこから先、風景とガイドさんの話を組み合わせながら日本との違いなど、様々な視点でオーストラリアについて学び、日本に帰国したらこの派遣で得た経験を広めていこうと思いました。そして、ALTの先生のおすすめであるフィッシュ&チップスを食べ、ホテルに向かいました。寝る前にはこれからの短期留学生生活を気を引き締めて頑張っていこうと思い、初日が終了しました。



## <アボリジニ文化センター視察>

忍岡中学校 久保田 衣悠  
桜橋中学校 達 彩葉

私たちは、8月6日にアボリジニ文化センターに行きました。そこではアボリジニの歴史や文化について学ぶことができました。アボリジニとは、昔からオーストラリアに住んでいる先住民族のことです。500以上の先住民がいて、それぞれの部族が異なる言語を話していました。そのため、自分たちの部族の言語だけでなく、隣の部族の言語までも覚えていました。植民地にされているときは、会うことも許されず、先住民同士が会わないようにイタリア人やスペイン人などが住んでいる場所に移住させられていました。また、自然を大事にしており、草も食べるだけでなく、編んでかごにして木は傷口をふさぐものとして使い、一つの物から二つ三つの用途を作り出すことができると知って感動しました。

他にもビッグバードと呼ばれる筒状の物で音を鳴らしました。昔の携帯のようなもので何か連絡する時に使われました。また、カンガルーの毛に触れることができ、初めて触りましたが毛が柔らかくすごく癒になる感触でした。最後に一人ずつ自分で考えた物語でブーメランに絵を描きました。ブーメランに絵を描いた後は実際にブーメランを投げるために外に出ました。一回目は思った以上にブーメランが飛ばずに苦労しましたが、現地の方がコツを教えてください、二回目はしっかりと上に飛ばすことができました。

アボリジニ文化センターを訪問してみて、私は、オーストラリアのことだけでなく、アボリジニのことについても詳しく学ぶことができました。現地の方が優しく身振り手振りを使いながら私たちに教えてください、日本では経験することができないお話を聞くことができました。これからもこのアボリジニ文化センターでの経験や知識を、学校や生活の中でみなさんに伝えていきたいと思えます。



## <ホストファミリー対面とホームステイ>

忍岡中学校 篠原 諒

この中学生海外短期留学派遣で一番印象に残っていることは、滞在させていただいたホストファミリーとの生活についてです。僕はマクレーンさん一家に受け入れてもらいました。初日からピットウォーターハイスクールでは、丸一日英語だけの授業を受けてきました。バディのルーカス・マクレーンさんが year 9 (中学3年生)だったこともあり、勉強が難しく、言語が英語だったので聞き取ることも苦労しました。ランチタイムには友達もたくさん紹介してくれて、帰宅後にみんなと近所の公園でタッチラグビーをして遊びました。休日は、マンリービーチというとても有名なビーチに連れて行ってくれました。とても寒かったのですが、サーフィンをしている人がたくさんいました。近くにはビーチバレーボールのコートがありましたが、あいにくの天候で誰もやっていませんでした。帰宅後、オーストラリアで冬の定番である「ホットチョコレート」を作ってくれました。とても美味しくて体も温まりました。月曜日は、コアラパークに連れて行ってもらい、間近でコアラを見たりカンガルーに餌をあげたりと、オーストラリアならではの様々な動物と触れ合うことができました。特にコアラは写真で見るとより可愛かったです。最終日のフェアウェルパーティーでは、お母さんのパトリシアさんに「この家は、私たちの家でもあり、あなたたちの家でもある」と言ってもらえてとても嬉しかったです。長いようで短かった6日間はあっという間でした。

桜橋中学校 久保 叶多

私は、ホストファミリーの方と対面するまでとても緊張していました。不安がある中、ホストファミリーの方はとても優しく、温かく迎えてくれました。家の説明や生活の小さなルールなども教わり、オーストラリアの文化の違いを実感することができました。例えば、お風呂に浴槽がなく、シャワーだけしかないことや、家に靴のまま入っていいことなどがありました。一緒に料理をしたり、学校や町の話の聞いたりしてとても親しい関係になり、学校では周りの人に紹介してくれました。

休日は海や山に出かけ、シドニーまでフェリーで行くなど、様々なことを体験させてくれました。特に一番思い出に残ったのは、フェリーです。乗っているときに、シドニーの街並みや小さい山などが見えてとてもきれいだったからです。ホストファミリーと出かける機会もあり、心に残る思い出もできました。この経験を通じて、異文化理解と人との関わり方の重要性を改めて学びました。今では感謝しかありません。この5泊6日は僕の大切な思い出になりました。



## <ピットウォーターハイスクールでの授業体験>

上野中学校 安立 もい  
上野中学校 成田 瑞葵  
上野中学校 山木 はる

Pittwater High Schoolでの授業体験についてだ。私たちはPittwater High Schoolで4日間授業体験をした。学校はいくつかの棟に分かれていてとても広かった。1時間目と2時間目の間、もしくは2時間目と3時間目の間にMorning Teaという時間があり、4時間目と5時間目の間にランチ2という時間があった。そこでは一回25分間、生徒たちが自由にお菓子やご飯を食べたり遊んだりできる時間があった。日本の学校とは大きく違い、自由な時間が多かった。

私たちはこのPittwater High Schoolで環境の授業を体験した。私たちの受けた中学三年生の授業ではパーム油が環境に及ぼす影響について学習した。授業中に先生がおっしゃっている内容はとても難しかった。バディの子にパソコンで翻訳してもらおうと、先生はとても丁寧かつ優しく教えてくれていて、生徒たちにとってもありがたいと私は感じた。生徒たちも真剣にパソコンに向かって必死に課題をこなしていたため、私たち日本人も見習っていかなければいけないと少し反省した時間だった。授業中は、学習に集中し、休憩時間はたくさん笑う、そんなメリハリのある生徒たちを尊敬してこれから生活していこうと思った一時間だった。ただ、日本では環境という科目がないが、この学校のように社会という科目で括るのではなく、科学と生物のように分けることで個人の得意分野がはっきりとわかるというメリットがあり、私は初めて社会という科目で楽しいと思えたのが環境の授業だったため、日本にもこのような科目の授業があってほしいと思った。

また、私たちは、日本とは違った体育の授業も体験することができた。具体的には、ラグビーとサッカーの授業だったのだが、授業というよりも、「昼休みの校庭」といった雰囲気でもとても楽しかった。特に、男子も女子もお互い全力で取り組んでいる姿が、印象的だった。それまでは「大人っぽい」というイメージを抱いていた一学年上の生徒たちにも、少年少女らしさがあることを知り、親しみやすさを感じた。そして、グラウンドの周りにはアルパカ、カモ、ヒツジ、ニワトリなどたくさんの動物がいて、写真を撮ることもできた。実際に現地の生徒に話を聞いてみると、それらの動物は生徒自身で飼育をしているようで、アルパカには一頭ずつに名前が付いていた。そして、それぞれのアルパカの性格や、歳などの詳細まで教えてくれた。このようにたくさんの愛に囲まれながら過ごす動物たちに、羨ましささえ感じた。この1時間は、Pittwater High Schoolの温かさを感じた、とても大切な時間になった。

Pittwater High Schoolでの授業体験は、私たち日本の生徒にとってとても貴重な時間だった。普段味わえない英語での授業や文化に触れることができとても良い経験になった。授業中に優しく教えてくれたり、ランチタイムにお菓子を分け合ったり、一緒に写真を撮ったり、遊んだり、一緒忘れられない貴重な体験となった。



## <フェアウェルパーティ>

上野中学校 山田 杏  
桜橋中学校 五十嵐 七海

私たちの行ったフェアウェルパーティーは、約6日間お世話になったホストファミリーと Pittwater High school のみなさんに感謝を伝えるため行われました。1時間ほどのリハーサルを終えて少しの疲れが見える中での食事会では、ホストファミリーの子やバディの子全員が集まって様々な子と仲良く話しながらお菓子やジュース、ご飯を食べて交友を深める楽しい時間にする事ができたと思います。パーティー本番では Pittwater High school の方々が準備してくださっていた合奏とダンスを鑑賞しました。その後、私たちのパフォーマンスをしました。個人的には、本番でかなり緊張していたものの、合唱とソーラン節どちらも今までで一番よい出来だと言っていただけで、とても嬉しかったことを覚えています。特に、ソーラン節は自分が踊っていても分かるほどのやる気と熱気をこめながら踊ることができ、一致団結した最高のパフォーマンスを披露できました。お世話になった人達への最後の機会として、全力を出し切ったよい会だったと思います。

フェアウェルパーティーの前日、ホストファミリーとバディに手紙を書きました。心からの感謝を込めて手紙を書きましたが、言葉では尽くせないほどの思いがあります。そして、手紙で伝えきれなかった思いを歌とソーラン節にのせました。これまで積み重ねてきた練習を発揮し、最高のパフォーマンスができたと思います。事前学習より一生懸命、練習を繰り返してきたかがありました。ソーラン節が終わった後に聞こえた盛大な拍手で会場が埋め尽くされたとき、これで最後なんだということを実感し、感極まりました。約6日間、皆で楽しい思い出をたくさん作った分、お別れが惜しくなりましたが Pittwater High school のみなさんと私たちで素晴らしい会にすることができたので、後悔や心残りはありません。短い間でしたが、Pittwater High school のみなさんとホストファミリーのおかげでとても充実した時間を送ることができ、私の人生の中で忘れられない1日になりました。



## <シドニー市内視察>

桜橋中学校 高橋 あぐみ



私たち1班は、始めにパン屋に行きました。どうやってパンを買えばいいのかわからず時間がかかりました。しかし、前にいた人の真似や、ジェスチャーで伝えて、全員パンを購入することができました。私は今までオーストラリアではセルフレジしか使ってこなかったので、対面で何かを購入するのは緊張しましたが、とても良い経験になりました。

オペラハウスを見に行った後はシドニー動物園に行きました。しかし、チケットがうまく購入できず、時間がかかってしまいました。始めは「どうしよう」となり、何回もチャレンジしていましたが、簡単な

英語を使うことで、お店の人に買えないことを伝えることができ、チケットを購入することに成功しました。この時、全員で力を合わせる経験ができて、とても嬉しかったです。協力して班行動をやり遂げることをオーストラリアで経験したことは、とても貴重で自信をもつことができました。

浅草中学校 間 大真



私たち2班は、移動時間を効率よくするために前日に、決めた予定とは少し違うルートでシドニー視察を行いました。

最初に行ったセントメアリー大聖堂は、とても広く、パイプオルガンの音色が響き渡り、美しいステンドグラスから差し込む美しい光を見ることができました。初めて教会を訪れて、その美しさに感動しました。その次に行ったオーストラリア博物館では、学校にもいた鳥や、とてもリアルなたくさんの剥製、先住民の文化や歴史に関する展示を見て回り、日本とは

違う生態系や文化を学びました。昼食には、甘くて満足感のあるパンケーキを食べました。そこから少し歩いて間近で見たオペラハウスからは、同じ世界遺産だけれど、国立西洋美術館とは全く違う素晴らしさを感じました。さらに歩いて、シドニー天文台まで行き、そこからシドニー市内を一望しました。派遣が終わってしまうのはさびしいけれど、最終日に班員とたくさんのところを回り、思い出を増やすことができ、派遣のいい締めくくりとなりました。



私達3班は、オペラハウスやロックス、動物園にセントメアリー大聖堂へ行きました。オペラハウスに行くまでの道は船乗り場やお土産ショップなどのお店がありとても活気のある所でした。オペラハウスでは、建物の周りを一周したり集合写真を撮影したりしました。ロックスの後は、歩いて動物園へ向かいました。動物園ではオーストラリアでしか見ることのできない動物を見ることができました。その後、セントメアリー大聖堂へはバスで向かいました。実際に見るセントメアリー大聖堂はとても迫力がありました。中が仄

暗いおかげで前にあるステンドグラスがより際立って見えました。

最後、時間が余ったのでデパートに行きました。そこでは皆、思い思いの時間を過ごせたと思います。この視察では、シドニーのよい所にたくさん気付く、とても貴重な時間でした。



私たち4班は、最初にオペラハウスを見に行きました。道中、現地の路面電車に乗りました。オペラハウスについてからはお土産を買ったり写真を撮ったりしました。

次に、パイロン展望台まで行きました。展望台では、シドニーの景色を一望することができました。その後は現地のパン屋へ行って昼食をとりました。行く途中にコンビニによってお菓子などを買いました。パン屋の後はQVBへ行きました。館内にはいくつもの店舗があり、私たちはキーホルダーなどを買いました。QV

Bを出た後は、ダーリンハーバーへ行きました。そこで景色を見たり、みんなでジェラートを食べたりしました。ホテルに帰る途中では、現地のスーパーで買い物をしました。そして無事にホテルに到着することができました。

私たちはこのシドニー視察を目一杯楽しむことができました。



私たちはこの日、班ごとに分かれてシドニー視察をしました。まず、フィッシュマーケットへ行きました。フィッシュマーケットではお土産を買うことができました。その後は、シドニータワーアイへ行きました。シドニータワーアイの展望台からは、オペラハウスやハーバーブリッジなどを一望することができました。

次に、パン屋に行き、クロワッサンを買いました。そこで4班と会ったので、一緒にクロワッサンを食べました。その店のクロワッサンが人気ですぐに

売り切れてしまうと聞いていたので、売り切れる前に買うことができて良かったです。

その後、フェリーに乗ってザロックスへ向かいながら水上から景色を堪能しました。ザロックスを散策した後は、スーパーでお土産を買いました。シドニー視察では、時間内にたくさんの思い出を作ることができました。また、海外での班行動を大きな経験と学びにすることができました。

## <オーストラリアからの帰国、解散式>

桜橋中学校 長谷川 晃之助

最終日、シドニー視察が終わりシドニー空港に向かいました。飛行機に乗ると「オーストラリアにまだいたい」という寂しい感情があふれ出てきました。9時間20分のフライトでは、すっかり打ち解けた派遣生徒と会話をして過ごしました。往路はとても緊張していたのに、復路はとてもリラックスしたフライトになりました。羽田空港に着くとオーストラリアと比べて蒸し暑く、季節が真逆の日本に帰ってきたことを実感しました。

到着ロビーでは、早朝にも関わらず、たくさんの保護者の方々と台東区教育委員会のみなさまが迎えてくださいました。大勢の人に見守られながら、解散式を行いました。矢部校長先生のお話や生徒代表のあいさつを聞いて、無事日本に帰ってきたと実感しました。私は、人とコミュニケーションが取れるようになったことが、自分自身の成長したことだと思います。今回の経験を生かしてこれからも頑張ります。最後に、安心して派遣活動に取り組めたのは、多くの方々が支えてくれたおかげです。ありがとうございました。



## 人との関わりと学びの日々

御徒町台東中学校 長谷川 來実

私はこの短期海外派遣で自分がまだ知らなかった日本と海外の違いや文化などを学びました。生活も食事も学校もすべてが初めてでした。さらに会話はすべて英語で最初は不安でいっぱいでしたが、その環境で挑戦し続ければ、日を重ねるごとに自然と慣れていき毎日がとても楽しく感じられました。最後にはこの10日間が私にとって大切で充実した経験となりました。いろいろな経験の中で印象深い出来事や驚きもたくさんありました。

一つは、授業や学校生活です。授業体験をしたピットウォーターハイスクールでは、文化の違いとオーストラリアの人たちのフレンドリーな部分を強く感じました。生徒たちの制服はピットウォーターハイスクールの生徒であると分かれば、スカートでもズボンでも長袖でも半袖でもマフラーをつけてもよいとされています。登校時間が遅く、登下校は大半の生徒がスクールバスや車、自転車などを使っていました。授業は先生があまり干渉したりせず説明を聞いたら生徒たちが自主的にタブレットや道具を使い、運動や勉強、作業を進めている様子などが見られました。また、2時間目が終わった後に、Morning Teaというお菓子を食べたりスポーツをしたりできる中休みのような時間がありました。特定のクラスや教室がないことで、そのMorning TeaやLunchの時間は、外や屋内などいろいろな所で友達と集まって食べていました。授業の始めと終わりのあいさつがないところからも、日本との違いを大きく感じ、普段私たちが行っている「起立・気を付け・礼」は、日本特有の文化だったということを知りました。私は海外も特定のクラスがあると思っていたので、それが日本の文化の一つであることに驚きました。そして、生徒や先生たちは、私が英語がわからなくて困っていたら、笑顔で聞いてくれたり、明るく積極的にコミュニケーションをとってくれたりしました。私は、そんなオーストラリアの人たちのフレンドリーな人柄から、最初に抱いていた不安が消えていきました。



もう一つは、ホームステイです。ホームステイでは、文化の違いというより日本と共通しているところをたくさん感じました。シャワーの温度調整はできないけれど、トイレとお風呂場が別の部屋でした。食事も大きくは変わらず、ホームステイ最終日には「うどん」などの日本食や「インディカ米」「カレー」「韓国の麺」などアジア系の食事を食べました。週末にはホストファミリーの人達と買い物や公園などに行ってスポーツをしたり、家の近くの海や丘、街などに散策したりしました。日々の生活もあまり日本と変わらず、とても馴染みやすかった印象が残っています。また、ホストファミリーの皆さんがとても明るく優しく迎えてくれました。ペットを紹介してくれたり、一緒にパズルやビーズなどの遊びをしたりしました。朝や夜、会った時には挨拶と会話を積極的にしてくれました。「元気かどうか」「学校はどうだったか」「お腹はすいていないか」なども聞いてくれて、初めてのホームステイで最初はとても心配でしたが、たくさん気遣ってくれて、落ち着けました。毎回明るく話しかけてくれたことで私もその明るさに安心して笑顔でいることができました。特にイレナは、学校でも私のペアとして学校のことや家のこと、休日に何をしているかなど私が知らないことをたくさん教えてくれて、とてもよい友達になれました。これからもイレナとはよい友好関係でいたいです。

授業体験やホームステイ以外にも、アボリジニ文化センターで先住民の歴史を学び知識を深めたり、シドニー市内視察で観光名所を訪れたりして、たくさんの経験ができました。

私にとってこの短期海外派遣は、ホームステイ先の日常生活でも英語を使い、「初めての体験」をたくさんして、とても充実した10日間となりました。この時間は忘れられない貴重な思い出となりました。そして、オーストラリアの素敵な方たちと英語で話したり交流できたりしたことを通して、もっといろいろな人々と関わりたいと思うようになりました。今よりさらに英語力を高めて、またオーストラリアに行つて今回お世話になった人たちに感謝を伝え、恩返しをしたいと思います。

## オーストラリアでの経験

御徒町台東中学校 濱田 東摩

私は、今回のオーストラリア派遣が初めての海外渡航となりました。そのため、最初は大きな「不安」を抱えていました。しかし、今回の派遣を自分の力に変えてみせるといった決意を抱き、派遣生徒の仲間とともに、いろいろと準備をしてきました。そして、準備を進めていくうちに、「不安」よりも「楽しみ」という気持ちの方が大きくなっていきました。そして留学派遣の本番を迎えました。

現地到着時は、あまり海外にいるという実感がありませんでしたが、シドニーの街並みを観たり見学したりして、実感がわいてきました。先住民のアボリジニについては、アボリジニ文化センターで実際に体験しながら歴史や文化について学びました。

私たちはピットウォーターハイスクールの授業に4日間体験で参加させてもらいました。一人一人にバディが付いてくれて学校での行動を共にしました。私は、バディとの初対面で、自己紹介の際にうまく英語が話せませんでした。私のバディのジュードが優しく声をかけてくれたおかげで、安心して話すことができました。校舎はとても広く、授業の始まりと終わりのベルの音が大きいことや、学校の敷地内でヒツジやニワトリをたくさん飼っていることに驚きました。また、授業の雰囲気や校則が日本とは違って、とても自由度が高かったです。学校ではジュードだけでなく、ほかの生徒とも関わる機会がたくさんありました。その度に彼らから明るく声をかけてくれましたが、初日はやはり、自分の伝えたいことがうまく伝わりませんでした。この経験を受け、最終日までにはもう少しコミュニケーションが取れるようになっていきたいと感じました。

6日間お世話になったホームステイ先のジュード家は、6人家族で誰もが親切にしてくれました。冷蔵庫やテレビなどを自由に使わせてくれました。家もとても大きく、たくさんの部屋がありました。私はこの海外派遣で「伝統料理を食べる」ということがやりたいことの一つにあり、このホームステイ先のジュードのお母さんがこの目標を叶えてくれました。彼女は料理好きで、ラミントンやバラマンディを使った料理などいろいろ作って食べさせてくれました。朝ごはんでは、トーストに塗ったベジマイトを食べました。独特な風味があり、好き嫌いが分かれそうだと感じました。また、オペラハウスやハーバーブリッジも連れて行ってくれました。とてもよい思い出をつくることができました。ホームステイではたくさんの学びや経験をすることができ、ホームステイ最終日には、初日より確実に言葉の壁を乗り越えて、自分の思いを伝えられるようになっていました。ジュードファミリーがとても明るく迎えてくれたことが、海外が初めての自分を安心させてくれました。

そして日本に帰る日が近づくにつれて、さみしい気持ちが大きくなってきました。お世話になったホストファミリーには、フェアウェルパーティーを通して、これまでたくさん練習してきた歌やソーラン節を全力で披露して、最大の感謝の気持ちを表現して伝えることができました。また今回の短期留学派遣で得た経験を、これからの中学校生活や、高校進学へ向けて生かしていきたいと思いました。また、この経験を学校の友達や、習い事の友達に発信していくことで、自分だけでなく、周囲にも、将来への視野を広げられるような手助けをしていきたい、そう思えた10日間でした。

## 一生の思い出の10日間

柏葉中学校 五十嵐 ひまり

毎日が学びにあふれ、とても充実した一生の思い出に残る10日間を過ごした。8月5日に空港に集まった時から私はとても不安を感じていた。文化も言語も違うオーストラリアで、しかも親元を離れて10日も生活できるのかと不安でいっぱいだった。そんな中、飛行機に乗り、現地に着くと日本とはまるで違う雰囲気にも心躍らせた。初日はアボリジニについて学んだり、フィッシュ&チップスやオージービーフを食べたり、シドニーの雰囲気を楽しんだ。一方で、みんなで行動していたので現地の方と話す機会が少なく、まだ「海外に来た」という実感はあまりなかった。次の日、ドキドキしながら学校に着くと、たくさんの現地の生徒の大人びた雰囲気をみて少し圧倒され、「今日からこの子達と生活していくのか」とやっと海外に来た実感が湧いた。

学校全体の様子や授業の様子を見て一番驚いたのは自由度だ。まず日本のようなかっちりした制服はなく、指定のスエットを着ていけば大丈夫だった。そして髪型の決まりがなかったり、ピアスやメイクをしてもよかったです。生徒一人ひとりの個性があり、いいなと思った。私が驚いたのは自分のクラスがないことだ。日本では学級で同じメンバーで授業を受けて行動するが、現地の学校では、授業によって一緒に受ける人が毎回変わり、完全に個人主体だと思った。授業では決まった席がなく、どこに座っても自由だった。授業中はおしゃべりをしたり、ゲームをしていたりして驚いた。全てが英語だったので、先生の言っていることが全然わからなかった。だが、バディの子が翻訳を使って教えてくれたり、先生のご厚意で日本語に翻訳したテキストを作っていたり、教科書を貸していただいたので分かるところもあった。始まりと終わりのあいさつがなかったり、授業が終わるころには席を立ててドアの前で待っていた生徒もいたりしたので、始まりと終わりは曖昧だった。鳥も校内に入ってきてしまうくらいオープンな学校で私も自由に学びたいと思った。

私がこの海外派遣で一番思い出に残り、そして一番不安だったのはホームステイだ。海外で、知らない人の家で生活することがとても不安だった。だが、学校まで迎えに来てくれたスティ先のお母さんの顔を見てお話ししたら、とても優しい方で一気に不安が和らいだ。お家でのお母さんは「一緒に UNO しよう」と誘ってくれたり、言葉が分からなかったときには翻訳を使ってくれたり、私のつたない英語にもうなずいて聞いてくれるなど、感謝してもしきれないほど優しくしてもらった。ホームステイ先のお父さんも、とてもおもしろい人で明るく接してくれたり、土曜日にはドライブに誘ってくれたりなど、お父さんにも感謝でいっぱいだ。私は犬が苦手だったが、ホームステイ先の飼い犬のテディとは一緒におもちゃで遊ぶほど仲良くなれて、犬嫌いも克服できた。ホストファミリーに「何かしたいこととか見たいものはある？」と聞かれ、「スーパーや動物園に行ってみたい」などと答えるとそれらをすべて叶えてくれてとてもうれしかった。家の中で話したホストファミリーとの何気ない会話がとても楽しかった。あんなに不安だったホームステイがこんなに楽しいものになるとは思っていなかった。最後のフェアウェルパーティーでは、バディの子ともホストファミリーともお別れでとてもつらく悲しかった。フェアウェルパーティー前のランチでは、バディの子や現地の学校の友達と「ラミントン4つも食べた！」と盛り上がっていたのにいざ別れとなると感極まった。

現地で関わった人たちはみなさんいい人たちでたくさん優しくしてもらった。みなさんのおかげで現地での生活が楽しく、快適に過ごせたので感謝の気持ちでいっぱいだ。そして、書類選考のときから行く時までたくさんの人に支えられた。絶対に一人では成し遂げられなかったので心から感謝したい。私が現地で経験したことをたくさんの人に伝えて、今後の国際社会の発展につなげて、活躍していきたい。

## 感恩戴徳に溢れた10日間

柏葉中学校 吉田 芽生

私は台東区の代表としてオーストラリア短期留学派遣に参加する際に書類審査や面接などを通して自分の意思を伝えてきました。その時に私は、「負けず嫌いなせいですぐに人と比較し自分を見失い、素直になれず強がってしまう」と話しました。その行動を改善するには環境を大きく変化させて自分を見つめなおす機会を作り、人と比べて努力するのではなく自分と闘いながら成長することが必要だと思いました。

空港で出発式をしていた時にふと、この海外派遣を成功させるためにたくさんの時間と周りの人に支えられていることに気が付きました。それと同時にその恩や期待にこたえられるように責任をもって楽しむことを大切にしたいと思いました。そして校長先生や代表生徒の言葉が次々に終わっていくにつれ、これからのオーストラリア派遣へ行くことへの緊張が興奮へと変わっていききました。

オーストラリア派遣3日目から8日目はPittwater High Schoolで授業体験をし、ホストファミリーの家で五日間過ごすという英語漬け生活が始まりました。学校に入るときに現地の先生や生徒からの温かい視線を感じ、この海外派遣に参加することができて本当によかったと、とても思いました。また、Pittwater High Schoolが主催する歓迎会では、これからの学校生活でお世話になるバディとの交流をすることができました。自己紹介をするときに英語のはずなのに緊張と慣れない発音のせいでうまく会話をする事ができず、情けなさと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。しかし、バディもわかりやすい単語やジェスチャーなどを使い伝えてくれたため、あきらめるわけにはいかないと思うことができました。そして、私が現地の学校に行って一番驚いたことは自分たちが専用で使う教室がないことです。日本だと、大半が自分のクラスに教科の先生が来て、時々教室移動という形ですが、私が訪問した学校は選択したクラスに毎授業、その各教科の教室へ移動するという形でした。また、自分の席も決まっていないため友達との枠がより広がり、価値観の違いにもより気が付ける効果があると感じました。そして、その効果が一番感じられた授業は、歴史です。ホワイトボードなどを使い近くの人と協力しながら課題を進めていたので、自分が選んだ席によって様々な人とコミュニケーションをとることができると感じました。

初日の授業が終わり外に出るとこれからお世話になるホストファミリーと初めて対面し軽く会話をした後、車でホームステイ先へ行きました。家に着くと一つ一つ部屋の説明をしていただき最後にはぜひ楽しんでねと声をかけてくださりました。家族で会話をしているときも常に私たちを気にかけて会話に入れてくれたり、日本のことや私たちについても話しかけてくれたりとなじみやすい環境を作ってくださいました。また、その時にUNOで沢山遊ばせたり姉妹の2人や私のバディの子と仲を深めていくこともできました。休日には動物園やビーチ、スーパーなど私たちの行きたいところを考慮し計画を立ててくださいました。オーストラリアへの思い出をより濃くしてもらうことができました。最後の別れの時に、「本当にオーストラリアに来て、出会ってくれてありがとう」と言われとてもうれしく、より寂しい気持ちでいっぱいになりました。

私はこの海外派遣に参加することができて本当によかったと思っています。ホストファミリーや現地の学校の先生や生徒、バディ、そしてオーストラリア派遣に関わってくださったたくさんの人達に支えられながら忘れられない思い出ができた本当に幸せでした。最初は、自分で時間をかけて頭の中で英語の文を作り、わからない単語は調べていたのが、最終日に近づくにつれ、自然と言葉が出てくるようになりとてもうれしかったのを今でもはっきり覚えています。そして、なによりも日記を毎日書いていたことで、自分と向き合い、寄り添う時間ができ、心に余裕が生まれ、面接で話したことを実行することができたことが本当によかったです。

## 「世界共通の挨拶、感謝」

上野中学校 安立 もい

「行ってらっしゃい！」そう言う母が徐々に遠ざかっていく。楽しみではあるが、寂しくも感じた。そして私には「英語で会話をする」という最難関のミッションがあった。最初は、この10日間をどう過ごしていこうかと不安を抱えていたが、最終日には心から「楽しかった！」と言えるような自分になっていた。

私の母親はよく「英語は今のうちに勉強しておいた方がいい」と言う。私も前から「英語を話せたらカッコいいな」ぐらいには思っていたが、あまり重要性を理解してはいなかった。具体的な勉強方法を母に直接聞いたが全然教えてくれない。だから私はどうすれば英語を話せるようになるか自分なりに考えた。必死に単語をノートに書き綴った。英語の授業も積極的に取り組んだ。だが、英語をすらすらと話す能力は日本語と同じようには上達しなかった。そう路頭に彷徨っていた時、「台東区海外短期留学派遣事業の応募のお知らせ」という一枚の応募用紙が目に入った。私はその瞬間、「これだ！」と思った。だが詳細を探っていくとあることに気が付いた。この海外派遣事業は私が所属している吹奏楽部の年に一度の大事な大会の日程と重なっていたのだ。部活に迷惑をかけたくはない。だが私はどうしてもこの海外派遣事業に応募することをあきらめきれなかった。応募終了期日までたくさん悩んだが、行くことを決心したのだ。

今回の派遣では現地の学校での授業体験、ホストファミリーとの交流など多くの場面で英語を話す機会があった。楽しみだったはずの英語での会話も、いざ現地に行くと自信がなくなってしまった。しかし、バディの子が積極的に話しかけてくれたり、日本語で「こんにちは」と通りすがりに挨拶してくれたりするうちに会話の楽しさに気が付いた。私にはもう一つ気付いたことがある。「挨拶は世界共通」ということだ。「こんにちは」や「Hello」など挨拶を交わすときに発する言葉は国によって違う。しかし、挨拶によって生まれる笑顔は世界共通だ。挨拶は国籍が違う人でも今まで会ったことのない人でも笑顔を生むことのできるいわゆる魔法のようなものだ。その魔法で世界は結ばれている。また、これが絆を深めるための第一歩でもある。

私は一緒にホームステイをした友達とショッピングモールに行き、密かにメッセージカードを購入した。フェアウェルパーティーでバディとホストファミリーに恩返しをするためだ。休日にもたくさんのおもてなしを用意してくれていた。私たちが恩返しできる一番のチャンスはフェアウェルパーティーだと思った。私たちが一か月前から練習を続けてきたソーラン節、自分たちで曲を決め、振りを付けた歌。隙間時間に書いた手紙をプレゼントした。とても喜んでくれて、心の底からやってよかったと思った。また、ホストファミリー、バディと私たちを深い絆で表すような見えない糸が繋がって見えた気がした。私たちが心を込めて書いた手紙、たくさん声に出した「Thank you so much」もちゃんと感謝を乗せてホストファミリーなどに届いたと思う。感謝することも挨拶と同じで、「世界共通」なのかもしれない。

この10日間は、私の13年間の中でも一番と言っていいほどいいほど濃密だったと思う。私が残念ながら出られなかった吹奏楽部の大会も無事に上野中は金賞をいただけて安心した。だが、それに勝るほどの中身が詰まった貴重な体験を数えきれないほどさせていただいた。それはこの機会を作ってくださった教育委員会の方々、引率して私たちを支えてくれた先生方、たくさん応援してくれた保護者等の協力があったからこそだと思う。また、一人では慣れない環境に耐えきれなかったと思う。不安でしかなかったが20人という仲間がいたことで、どんなに辛いことでも乗り越えられた気がした。人生には必ず、出会いと別れがある。私はホストファミリーとの別れが近付いていると分かった時、悲しかった、離れたくなかった、もう少しだけ一緒にいたいと思った。飛行機に乗るときもオーストラリアを離れることがとても寂しかったが、日本に到着した頃にはあまり悲しい気持ちにはなっていなかった。私が体験したことを家族、友達に伝えていきたいと思えるようになっていた。将来、必ずまたオーストラリアに行って、大好きなホストファミリーに会い、新しい思い出を刻みたい。そして、これからも沢山の「ありがとう」と「こんにちは」を伝えていきたい。

## 「13年間と10日間」

上野中学校 成田 瑞葵

8月5日、日本を出発した日の夜、羽田空港のゲートの前で、私は悲しい気持ちに包まれながら家族と別れた。これから一週間以上、家族とは離れ離れだ。この派遣が楽しみではあったが、不安でもあった。この10日間は、私にとって初めてのことばかりだった。海外へ行くということ、その上英語でコミュニケーションを取って生活するということはさらに貴重な経験だったと感じている。

私には、7歳離れた弟がいる。私は、弟がどのようにして日本語を覚え、話せるようになっていくのかという過程を見ていた。2歳くらいまでの弟は、周囲の人が発した言葉の中から、単語だけを読み取って言うことが多かった。しかし、だんだんと単語をつなぎ合わせるようになり、数か月後に7歳になる弟は現在、日常会話は余裕でできるようになっている。では、私たちの英語の上達はどうか。私は小学校に入学する前から英語学習に取り組んできたが、それでも弟の日本語ほどの上達は見えていないような気がしている。おそらくその原因は、私は英語をインプットしているだけであり、アウトプットにあたる会話を十分に行っていないことである。

今回の派遣では、Pittwater High Schoolでの授業体験や、ホストファミリーとの関わりの中で、英語を会話に用いる場面が多くあった。私は、初めてバディと会った時、自分の英語に自信がなかった。しかし、授業を受けている中で、単語の意味について尋ねてみたり、バディの人以外ともコミュニケーションを取ってみたいとしたことで、自信をもって堂々と話すことができるようになった。

また、成長した点はそれだけではない。私はこの海外派遣の期間、たくさんの感謝をした。「Thank you」と言った回数の方が、断然「ありがとう」よりも多かったような気がする。それだけ、誰かに感謝を伝えることができた。例えば、ホームステイ先の家族と一緒に出掛けたとき、何かを手伝ってもらったことが多くあった。その度、私はたくさん感謝の言葉を伝えた。そして、現地でメッセージカードを購入し、それまでの思い出や感謝の言葉などを綴った。そのカードはフェアウェルパーティーの時に渡したのだが、とても喜んでくれて、書いてよかったと心から思った。きっと私たちは、その感謝の言葉だけでは足りなくらい、大切なものをたくさん与えてもらったと思う。しかし、私は、フェアウェルパーティーでのホストファミリーとの会話を通して、感謝はどれだけするかではなく、どのようにするかの方がずっと大切なのだと思った。私たちが言ったお礼の言葉は、心をこめて初めて、「感謝」としての意味を成し、相手に届いていたはずだ。

確かに、この10日間は、これまで私が過ごしてきた13年間と比べたら、圧倒的に短い。だが、この10日間の中には、様々な大切なことが詰まっていた。それらはきっと、この派遣に参加しなければ得られない貴重なものだ。そしてもう一つ、一緒に頑張ろうとした仲間がいたから、このような経験ができた。きっと一人では、この普段とは違った環境を乗り切ることや、楽しむこともできなかつただろう。だから、私はこの派遣に参加できて、本当によかったと思っている。

8月14日の朝、成田空港に到着した頃、私は希望をもつことができていた。出発前のあの不安な気持ちはもう、どこかへ消えていた。この自分自身の感情の変化に、すごく驚いた。オーストラリアでは、十分過ぎるほど思い出を作れた。だから、次は家族や友達にこの体験を伝えたいと思った。そして、大好きなホストファミリーの方々に会いに、またオーストラリアへ行きたい。

## 「10年先に行く場所で学んだこと」

上野中学校 保坂 旭宏

このオーストラリアへの海外派遣でとてもよく分かったのは、日本との違いだった。

僕はICTに興味があり、日本と比べ10年進んでいると言われるオーストラリアで、実際どのようにICTが活用されているのかを確かめるために海外派遣に参加した。

海外に行くのは飛行機に乗るのも初めてだったので、とても不安だった。だが、シドニーに到着し、アポリジニ体験を終え、ホテルへ向かう途中、日本との違いに驚いた。なぜなら、道を走るライトレールや道のいたるところに置かれたシェアサイクルなど、少なくとも自分が住んでいる地域ではありえない光景だったからだ。

しかし、まちの中だけではなく、もう一つ日本との違いで驚いたことは、授業体験をしたPittwater High Schoolだった。僕の通う上野中学校より広がったが、大きく違うのは授業だった。まずどの授業でも主に使うのはノートパソコンだが、上野中学校のように区から支給されたパソコンではなく、自分たちが用意したノートパソコンを使うのである。自分たちで購入しなければならないというデメリットはあるが、使い慣れているパソコンを使用することができ、また、使い勝手がよいものを授業で使うことができるという大きなメリットがある。

また、日本では教室の中心に大きな黒板があり、添えるような形でモニターがあると思うのが多いと思うが、Pittwater High Schoolは大きなモニターが中心にあり、片側にホワイトボードがあり、日本とは逆なのだ。教科書はすべてデータとして生徒に配信されていて、毎授業生徒たちはパソコンを開いて授業ごとの教科書に切り替えればよいだけなので、分厚い教科書を持ち歩く必要もない。ロッカーなどに収納しておく必要もない。毎日の時間割は、生徒たち一人一人のマイページのようなウェブサイトの中であらかじめ2週間分の授業が配信されている。授業の始まりと終わりはベルがなり、「お願いします」のような挨拶や、朝の会や帰りの会もない。しかし、集まったときは必ず列を乱さず、座るときは「失礼します」といって体育座りする、などのこともない。文化的な違いはあるものの、日本と比べて「礼儀」や「規則正しさ」に対する意識がやや控えめに感じられる場面もあった。その一方で、生徒たちは全員がパソコンを自然に使いこなし、家庭科ではレシピの紙一枚を手に、迷うことなくマフィンを作り上げる姿が印象的だった。そうした様子から、日本と同じくらいの水準を保っているだけでなく、むしろ新しい力を感じる場面もあり、心から感銘を受けた。

ホームステイ先の家族との交流では、英語でないと意思疎通ができないという今まで経験したこともない状況で、家族の方々とコミュニケーションをとらなければならないので、とても大変だった。だが、相手はとても優しく接してくれて、ジェスチャーなどを通して少しずつコミュニケーションが取れるようになった。週末はショッピングモールやビーチに連れて行ってくれたり、ゲームや映画を見て楽しんだりすることができた。このような体験を通して、ゲームや映画などの趣味のような話はコミュニケーションの壁を飛び越えてすることができることが分かった。

僕はこの海外派遣を通じて、日本の学習環境とは異なるオーストラリアの教育、特に日本とは比べられないほどのICTの活用力に触れることができた。ホストファミリーとの生活のなかでも、言葉が通じない中でも伝えようとすることで意思疎通ができることを知り、体験することができた。総じて、この派遣では僕にとってかけがえのない大変貴重な体験となった。

## 「挑戦」

上野中学校 山木 はる

8月5日、私は空港で期待を胸に一步踏み出して父と母に「行ってきます！」と明るい声で言った。元氣よく言ったものの、私の胸には期待より不安の方が大きかった。私は海外に行くのも、親元から10日間も離れることすべてが初めての挑戦だったからだ。そしてもう1つ、最大の理由があった。私は日常会話ですら英語で話せなかったからだ。今まで授業以外で英語に触れる機会が少なかったので、1日中、ましてや1週間以上も英語のみの会話で生活できるのか、本当に自分はこの海外派遣を成功させることができるのか、とても不安だった。海外派遣に申し込む時もそうだった。私に本当に成し遂げられるのか、行ってもよいのか、すごく悩んだ。だが父と母が、私の背中を押してくれて、行くことを決心した。

今回の海外派遣では、授業体験やホームステイでたくさん英語で会話する機会があった。初めて現地の学校に行きバディのジェイダと話した時、私は正直とても怖かった。ジェイダはとても優しく接してくれたのに、自己紹介では分からない英語が出てくる度に会話が止まり、彼女を困らせてしまった。何も話せず嫌われてしまったのではないかと、面倒だと思われていないか、そう思うと怖かった。周りの友達を見ると、みんな笑顔で楽しそうにバディと話していて尚更不安になった。そのまま授業体験が始まり、私は何も分からないまま彼女に連れられて教室に入った。すると、教室のとある男の子が日本語で「こんにちは！」と挨拶をしてくれた。少しホッとした。聞き慣れた言語が聞こえてきたからということもあるが、自分のことを受け入れてくれた気がしてとても嬉しくなった。その後、ジェイダと図書室へ向かい、パソコンの翻訳を使いながら少し会話をした。その話の中で、ジェイダが「言語の壁はとてもやっかいです。だけど、それを乗り越えられるように私も頑張ります。」と言ってくれた。私はその言葉を聞いて、不安だった残り6日間の生活がとても楽しみになった。

ホストファミリーと初めて会った日、明るい笑顔で歓迎していただき、楽しい5日間になりそうだと胸が高鳴った。放課後や休日にショッピングセンターに行って、ジェイダと買い物をした。雑貨屋さんで、ジェイダが「手袋を買おう。登下校の時とか、とても寒いから。」そう言って手袋を買ってくれた。「ありがとう！」と言うと、「うん！全然大丈夫だよ！」と笑顔で話してくれた。その時少し彼女との絆が深まった気がした。アクセサリーショップにも行き、ジェイダとおそろいのネックレスを買った。1日1日過ぎていく中で、少しずつそのネックレスがかけがえのない大切な宝物になっていった。ホームステイ最終日の夜、お世話になった人に手紙を書くことにした。次の日、私は学校で仲良くなった友達2人に手紙を渡した。するとその友達2人が、跳んで喜んでハグをしてくれた。感謝の気持ちが伝わったのがとても嬉しかった。ジェイダにはお昼ご飯の時に渡した。笑顔で「thank you!」と笑顔で受け取ってくれた。フェアウェルパーティーでは歌とソーラン節を披露した。パーティーが終わった後、彼女が私にプレゼントをくれた。5日間の思い出を記録したアルバムだった。アルバムを見ていると涙が出てきて止まらなかった。ジェイダも少しだけ涙ぐんでくれていた気がした。

この海外派遣は私の人生13年間の思い出の中でも特に大きい経験となった。この経験は1人では得られなかった。企画をしてくださった教育委員会の方々、支えてくれた保護者、一緒に10日間過ごした20人の仲間がいたからこそものだと実感している。ホストファミリー、学校の友達と離れた時、すごく悲しい気持ちになった。飛行機の中でも帰りたくないという気持ちがこみあげてきて今にも泣きだしそうだった。家へ帰って、彼女とやり取りをすると、日本に行く予定があることを教えてもらった。その時、私は決めた。日本へ遊びに来て、もし会えるのなら、絶対に今回のことの恩返しをしよう、楽しませて見せる、と心に決めた。

## 日本との違い、人々の暖かさ

上野中学校 山田 杏

私は、今回初めての派遣留学に行くにあたって楽しみに思うと同時にとても緊張していました。初めてのオーストラリアに行けるという魅力や期待を感じつつ、きちんとコミュニケーションをとることができるのか、何かマナー違反をしてホストファミリーたちとの仲を崩してしまわないかなど多くの心配事があったからです。しかし、この私の最大の敵である緊張をなくしてくれたのは、人々の暖かさでした。心配とは裏腹にオーストラリアの人々はとても寛容で、日本語であいさつをしてくれるほど異文化への理解も深かったからです。

出発初日の8月6日と7日、今から旅行に行くような浮き足立った、わくわくした気持ちが強く、オーストラリアについてからも英語を使う機会はまだほぼなかったため、肩肘張らずに過ごすことが出来ました。しかし、ホームステイが始まると私は多くの日本との文化の違いに気付きました。

第1に「食」についての違いです。最初に感じたのは初日に食べたフィッシュアンドチップスやステーキです。前日まで日本にいた我々の身からすると量が多く食べきるのに苦労しました。これは多くの文化が入り混じるオーストラリアにおいてほとんど例外なくあてはまるもので、中華や日本食のラーメン、道端のジェラート屋さんで買ったアイスクリームでさえ日本の1.5から2倍ほどの大きさでした。値段も高く設定されていて頼みすぎないように気を付けなければなりません。また、お菓子や飲み物はかなり甘いものが多く、ホストファミリーのお母さんがオーストラリア人は甘いものが好きだと教えてくれました。

第2に「学校」についての違いです。6日間ピットウォーターハイスクールでお世話になって感じたことは、自由度の高さです。制服で通う学校ではあったものの、私の通う中学校とは違ってシャツやニットなどいずれかで学校指定の物を着ていれば、アクセサリやバッグは自由とされていました。また、授業中にも先生が見回りなどをしてはいるものの、生徒それぞれがその日の課題に取り組み、終われば飲食や各々のパソコンを使ったゲームが許されていて、日本と全く違う授業や学校の雰囲気にとっても驚きました。そして2限と3限の間には、お菓子や早めのお弁当を食べる時間があり、昼食の時間にも共通して仲のよい子同士で集まってご飯を食べながら話をするところには日本の休み時間と共通した雰囲気を感じ、親近感が湧きました。



第3に「生活や雰囲気」の違いです。オーストラリアの学校には部活や居残りが無いため、どんなに遅くとも午後3時頃までには生徒が学校を出ていました。ショッピングモールやレストランも午後5、6時ほどで閉まってしまいます。そのため、働いている人々も夜は家族や友人、恋人と過ごすことが多いそうです。またオーストラリアはどこを歩いていてもものどかで、日本のような時間に追われた気まじりはなく、自分がしたい時に、したいことを好きな場所でしているようなよい雰囲気を感じていました。

私はこの派遣留学で様々な面での異文化に対する驚きを感じるとともに、日本と共通する部分を見付けて嬉しくなることも沢山ありました。

最後に、私が言葉に詰まっても辛抱強く聞いてくれたホストファミリーやバディの子たちのように、人に対していつも穏やかに、親切に接することを意識したいです。そして、この留学派遣で得た経験やお世話になった人々への感謝を忘れずに、今後の海外渡航や英語学習に繋げていきたいと思いました。

## オーストラリアに行って

忍岡中学校 久保田 衣悠

私たちはこの海外短期留学派遣に行くにあたり何回も事前学習を行いました。事前学習では、オーストラリアのことについて調べ、班で一緒にスライドを作りました。また、現地のパーティーで披露する「ソーラン節」の練習もしました。ALTの先生からは派遣に向けて英会話の練習も行いました。事前学習は8回あり大変でしたが、それもよい経験になったと思います。

そしてむかえた当日、午前中は忘れ物がないか家族と一緒に入念にチェックしました。飛行機に乗る前、私はすごくワクワクしていました。しかし、それと同時に不安もありました。オーストラリアで上手く英語を話せるか、ホストファミリーと仲良くできるかなど心配なことはたくさんありました。それでも家族が私の背中を押してくれ、前向きな気持ちで飛行機に乗ることができました。

1日目私たちはアボリジニ文化センターに行きました。そこでは火の煙を水に見立てて体に浴びる儀式を行いました。その後、現地の方からアボリジニの歴史や文化についてお話していただき、実際にブーメランを投げる体験をすることができました。夕食にはカンガルーのお肉が出てきました。見た目は少し焦げていましたが中身は赤くとてもジューシーで美味しそうでした。

2日目、私たちは初めて現地の学校に行きました。歓迎会では、日本の曲「となりのトトロ」の主題歌「さんぽ」を歌いました。歓迎会が終わるとバディの子と一緒に授業を受けました。もちろんすべて英語でしたがバディの子が翻訳を使いながら教えてくれ少しではありますが授業の内容がわかりました。

オーストラリアの学校はお昼の休憩時間が長く、バディの子やその友達である子たちと一緒にお昼を食べました。そこでみんなとダンスを踊ったことも楽しかったことの一つです。バディの友達とは初対面でしたが、みんな積極的に話しかけてくれました。また、私に分かりやすいようにゆっくりと話してくれてすごく優しさが伝わってきました。

ホストファミリーとの対面ではお母さんが学校に迎えに来てくださいました。家に着くと私たちの部屋などいろいろ教えて頂きました。

ホームステイ先では見本とは違う文化に驚きました。オーストラリアの方々は「いただきます」と「ごちそうさま」をいう文化がないので私たちが「いただきます」と言うと「なんて言ったの?」と聞かれ、文化の違いに気付く場面でした。

ホストファミリーの皆さんは、私たちをオペラハウスやビーチに連れて行ってくださいました。オペラハウスは、想像していたよりもかなり大きくて迫力がありませんでした。フェリーでは、ハーバーブリッジとオペラハウス、どちらも写真におさめることができ、美しい一枚を撮ることが出来ました。オーストラリアには、ビーチがたくさんありました。ビーチの名前を教えてもらい、近くの公園で遊びました。

最終日のシドニー視察では、有名なパン屋さんのクロワッサンを食べました。午後になってしまいましたがギリギリ買うことが出来ました。すごくおいしかったです。シドニータワーの展望台からはシドニー全体を見渡すことができ、晴れていたのもとても美しく見えました。

私はこの派遣を通して挑戦することの大切さについて学ぶことができました。この派遣に申し込むのにはとても迷いがありました。でも、家族や友人に応援されて、不安でしたが思い切って申し込むことができました。大変でしたが、今ではこの派遣に参加できてよかったと思っています。

これからも、この経験を学校や生活の中で生かしていくと同時にオーストラリアの魅力や文化の違いについて伝えていきたいと思っています。

## オーストラリアでの学び

忍岡中学校 篠原 諒

僕たちはこの海外短期留学派遣に出発するまでにたくさんの事前研修を行いました。

出発する約1ヶ月前から、オーストラリアという国についてや先住民であるアボリジニの伝統や文化について学びました。各学校の代表であり区の代表であるという自覚をもち、礼儀正しく節度のある行動をしなければならないということを教わりました。その他にも、各班でオーストラリアについて調べ、分担してスライドにまとめました。事前学習を通して僕の中で目標が明確になったのは、事前学習が終わった日でした。

「オーストラリアに行って絶対いろいろなことを吸収して帰ってきてやる！そして、決して1日の一つの行動や出来事でも手を抜かずにやってやる！」という強い気持ちをもって出国しました。オーストラリアの空港に降り立ってまず一番に感じたことは、「なんか空気が違う？」「とても寒い！」でした。オーストラリアの空気は日本の初冬よりも澄んでいるように感じられてとても心地がよかったです。ホテルは市街地にあり、外観はとても豪華でした。部屋の内装はシンプルかつおしゃれでとても良いところでした。

3日目からは現地での受け入れ校であるピットウォーターハイスクールに通いました。そこでは、ホストファミリーの次男でもあるルーカスさんがペアとなってくれて、学校生活における授業や昼食など1日中いろいろなことを教えてもらいました。ルーカスさんがyear 9(中学3年生)だったことと、普段日本で受ける英語の授業で聞く英会話のスピードよりも段違いに早く、聞き取ることが難しかったことが相まって授業内容がさらに難しく感じました。オーストラリアの学校は「中学校」がなく、日本における中学1年生から高校3年生までが同じ学校で、各授業に参加する生徒も学年がバラバラでした。時間割も週ごとに変化していて、毎日5時間授業でした。放課後になると仲の良い友達と近所の公園でバスケットボールやタッチラグビーなどをして交流を深めました。僕が現地の学校生活で感じた日本との明らかな違いは、2時間目と3時間目の間に約20分間の休憩時間があり、そこではジュースを飲んだり、カップケーキやスナック菓子を食べながら友達と談笑をしたりと自由な時間があったことでした。お昼も給食ではなく学校の購買の様なところから渡されるランチボックスか、各家庭から持ってきたサンドウィッチやお弁当などを教室以外の校舎に隣接する庭で、学年関係なく仲の良い友達と集まって楽しく話しながら昼食を摂っていたことでした。ホームステイ先では、とても豪華なおもてなしをしてくれました。また、お母さんが日本に留学経験のある方で、片言の日本語で伝えてくれることもありました。しかし、家族との会話は、ネイティブスピーカーの問いに対して覚えた英語で、片言でしたが、精一杯コミュニケーションをとるようにしました。その結果、ホームステイ終盤には会話のキャッチボールが少しできるようになりました。週末は車に乗ってシドニー市街の方まで連れて行ってくれました。オペラハウスを間近で見たときは、屋根が矢筈(やがすり)模様だったことに驚きました。そして、とても磯の香りがしたのも印象的でした。ザ・ロック周辺は開拓時代の歴史を感じる街並みに日本にはないレトロな感じがカッコいいと思いました。そして、お土産を買ったりお茶をしたりと観光を楽しみました。夜は学校の友達を招いて家でピザパーティーをしました。ピザ生地はお父さんが、トマトソースはお母さんが作ってくれました。生地はもちもちでソースはオニオンがとても良いアクセントになっていて美味しかったです。食後はみんなでゴルフを題材とした「Happy Gilmore 2」というコメディ映画を見ました。とても面白くみんなでたくさん笑いました。

僕は言語と文化が違う方々とも一緒に笑えたことが嬉しかったです。そしてマクレーンさん一家にとっても馴染めた感じがありました。やはり笑顔は万国共通なのだと思います。ホストファミリーと過ごした6日間は僕にとってとても短く感じられました。もっと長く滞在して英語にも慣れることで友達と冗談を言い合えるようになったり、現地で人気のあるサッカーやタッチラグビーなどをしたりしてオーストラリアの文化にもっと触れていたかったです。

## 初めてだらけの海外派遣

浅草中学校 間 大眞

楽しみにしてきた海外派遣。初めてのオーストラリアに緊張しながらもわくわくしていた出発日を今でも覚えています。私はこの海外派遣で、積極的にコミュニケーションをとることの大切さを学びました。ピットウォーターハイスクールでの初日、バディはヘンリーという year 7 つまり中学一年生の青年でした。彼は積極的にこの学校のこと、授業の内容を私に伝えようと努力してくれました。私はそれがとてもうれしく、不安だった気持ちが和らぎ、こちらもわかろうとする努力をすることを心掛けました。学校内では、ヘンリー以外のクラスメイトや先生方もやさしく声をかけてくれ、日本という異国の文化や生活にとっても興味を持っていました。数日たって、伝わらないことを恐れて自分からはあまり話さない、わかろうとするだけ、それではもったいないと感じた私は、オーストラリアでの人気なものやこと、今は何をしているのかなど気になったことは自分から尋ねるようにしました。それに生徒たちは笑顔で答えて、話を盛り上げてくれました。自分から話しかける、これは勇気がいることだけれど、相手はそれにこたえようとしてくれる、だからコミュニケーションをとることは楽しく、言語が違ってもそれは同じだと、私は実感しました。今後語学力をつけて、今回よりもコミュニケーションを円滑に、そしてたくさんとることができるよう強く思いました。

今回私が特に印象に残っていることは二つあります第一にオーストラリアの街並みです。事前学習で学んだ通りオーストラリアはかつてイギリスに植民地支配を受けていました。その影響か、シドニー市内はヨーロッパを感じさせるような建造物が多くみられました。しかし、少し歩くと都会を感じられる、日本では見られない海岸付近の密集した高層ビルがありました。また、オーストラリアは自然が豊かで、緑にあふれた場所でした。学校では羊などの動物を飼育していて、鳥は数えきれないほど飛んでいました。ホストファミリーの家では飼っている鶏の卵から作った朝食を食べることもありました。第二にオーストラリアの文化です。食文化は、想像通り、ナイフとフォークはやや使いづらさを感じたり、米をほぼ食べなかったりということがありました。「いただきます」「ごちそうさま」というあいさつの習慣もなかったです。それだけでなくオーストラリアでは、朝食、昼食、夕食のうち朝食と昼食はコーンフレークやサンドウィッチなどの簡単な食事です。また、学校では朝食と昼食の間にはモーニングティーという菓子類で軽食をとる時間があり、下校後同じように軽食をとるアフターヌーンティーがありました。食文化以外にも、街中には様々な国籍を持つ人が暮らしていて、信仰する宗教もそれぞれでした。人々がそれを受け入れられるからこそその多文化社会だと今回自分が実際に受け入れてもらったことで強く感じました。そのような現地の方々の姿勢は、自分が目標としていた広い視野を身に付ける上で非常に参考になりました。最終日、私たち2班はセントメアリー大聖堂、オーストラリア博物館、シドニー天文台を途中、昼食をはさみながら訪れました。セントメアリー大聖堂の、ステンドグラスから差し込む温かい光やパイプオルガンの優しい音色はことばでは表せないほどの美しいものでした。教会のすばらしさを体感しました。オーストラリア博物館では、素晴らしいとてもリアルな剥製や、宝石、先住民の歴史を知るうえで重要な展示などを見て回りました。昼食はパンケーキを食べました。甘くボリュームでした。シドニー天文台からの景色はこの海外派遣を振り返るにふさわしい絶景で、少し寂しくもなりました。しかし、班員たちとつくった思い出を含め、オーストラリアで過ごした日々がわたしの人生の宝物となりました。

この海外派遣で私は、現地の人々の相手を思いやり、優しく受け入れる姿勢を通して、目標としていた視野を広げることができたと思います。また友達をたくさんつくることもできました。浅草中学校には外国籍の生徒もいるため、この経験を生かし相手を尊重し、様々な観点から物事を見られる人になっていきます。

## 刺激あふれる十日間

浅草中学校 村松 璃亜

初めての海外、オーストラリア。私がこの海外派遣で学んだことは「わからなくてもやればできる」ということです。私は英語が得意なほうではなく、意味がうまく伝わらないことや、分からないことが多くありましたが、伝える気持ちと理解しようとする気持ちがあればきっと伝わると分かりました。

現地校のピットウォーターハイスクールの初日は教科書が英語で読めないことがあったり、言葉の意味がうまく伝わらなかつたりすることもありました。しかし、バディやその友達が言葉の意味をくみ取ろうとしてくれ、嬉しいと思うのと同時にもっと英語を勉強しようと思いました。

学校が終わり、ホームステイ先の人の車で家に向かいました。住宅街でもマンションがなく一軒家がたくさんありました。ホームステイの中で一番驚いたことが3つあります。第一に、箸を使っていたことです。

ホテルやレストランではナイフとフォークが多く、外国の人はあまり箸を使わないと思っていたので意外でした。夕食でお米やのり、お味噌汁などの日本食が出てきて日本文化も親しまれていることがわかりました。

第二に、手作り料理が多いということです。カップ麺やシリアルといった簡単に作れるご飯ももちろんありましたが、手作り料理が多かったです。

第三に、自然との触れ合いが多いということです。私のホームステイ先の家には猫が2匹、鶏が2羽、ウサギが1匹いて、ピットウォーターハイスクールにもアルパカや羊等の動物がいました。大きな芝生の公園が多かったり、街にも大きな木がたくさん生えていたり、自然と触れ合う機会がたくさんありました。シドニー視察では主にオーストラリアの街並みを知ることができました。路面電車やバス、日本と同じ乗り物でも窓から見える街並みは日本と違います。

シドニーには、日本にあまりない石造りの建物や銅像がたくさんありました。そして、美術館や教会など歴史のあるものは建物が大きく、とても壮大でした。私がシドニー視察で、特に印象に残っているのは動物園とセントメアリー大聖堂です。動物園には初めて見る動物が多く、意外にもキリンやゾウ、パンダはいませんでした。ですが、コアラやカンガルーといったオーストラリアでしか見ることのできない動物もたくさん見ることができました。セントメアリー大聖堂の外観や内装はとても立派で、特に少し暗い教会にステンドグラスの光が差し込んでいるのは、つい見入ってしまうほど幻想的で美しいものでした。今まで教会に入ったことがなかったので、初めて入る教会がセントメアリー大聖堂でとても嬉しく思います。

私はこの海外派遣で多くのことを経験しました。初めての機内泊や、初めての海外。あのワクワクした気持ちは今でも覚えています。結団式の日や出発の日はまだオーストラリアに行くことにあまり実感が湧いていませんでしたが、授業体験をしたりホームステイで英語を話したりと、今までの日本での生活との違いを見付ける中で海外に来たという実感が湧いてきました。私は、海外に行くことで自分の視野を広げたいと思いこの海外派遣に応募しました。実際にピットウォーターハイスクールでの授業体験やホームステイをしていく中で文化の違いなど、たくさんのことを学ぶことができました。この海外派遣で味わった思いを、自分の将来や今後の勉強、学校生活に生かして行けたらなと思います。

## 海外派遣で学んだこと

桜橋中学校 五十嵐 七海

「求めよさらば与えられん」とは言いますが、その言葉の意味を初めて実感する10日間でした。

私はオーストラリアに到着してから、初めての経験をいくつもしました。最初に触れたのは優しさです。アボリジニ文化センターやホームステイ先など、いろいろな場所で優しさを受けました。ピットウォーターハイスクールでは、不安でいっぱいだった私にもバディやバディの友達がたくさん話しかけてくれました。校内で道に迷ってしまっていた時「Are you in trouble?」と声をかけてくれた人もいました。また、ホストファミリーの方々も忙しい中、私たちのためにいろいろな場所に連れて行ってくださったこと、とても感謝しています。しかし、オーストラリアでの生活は楽しいだけではありませんでした。ある大きな壁にぶつかったのです。それは、言語についてです。これは出発前から最も不安だったことです。私の英語力では言葉が通じないことは分かっていたのですが、実際に話してみると不安がどんどん広がりました。たくさん話しかけてくれるのに、理解できなかつたり、理解するのに時間がかかってしまつたりしました。しかし、言葉が通じなくても身振りや手ぶりなどを使ってコミュニケーションをとることができるを知りました。そして、さらに意思疎通するために、必要な英語力向上の意欲にもつながったのです。また、「こんにちは」など日本語で話しかけてくれたり、日本の歌を歌ってくれたりしたとき、ただ言葉が通じないだけであり、自分とかけ離れた遠い存在ではなく同じ地球で生きている仲間だということを改めて感じ、とてもうれしくなりました。



今回の海外派遣で学んだことはたくさんありますが、その中でも一番印象に残ったのは、日本とオーストラリアの文化の違いについてです。「おはよう」や「こんにちは」などをまとめて「Hello」と言っていたり、「いただきます」や「ごちそうさまでした」を言わなかつたりすることに違和感があり、文化の違いを感じました。学校では教科ごとに教室が変わつたり、9教科のほかにも興味深い教科が多々あつたりしました。さらに、2時間目と3時間目の間に morning tea という、持参したお菓

子やフルーツや、購買で買ったものを食べる時間がありました。また、オーストラリアは日本よりもデジタル化がはるかに進んでいることが印象的でした。授業では基本的にプロジェクターとパソコンを使っていました。日常生活でも、現金で支払ができない場所あるなど、デジタル化を感じる場面が多くありました。

この10日間、慣れない環境で生活する中、大変だったことや不安なことがたくさんありました。しかし、決してインターネットや本などでは知ることができない情報を実際に現地に行くことで肌で感じることができました。たくさんの貴重な体験を通し、自分を成長させることができたのは、この機会を作ってくださった教育委員会の方々、引率してくださった先生方、ALTの先生方、そして優しく見守り、応援してくれた家族のおかげです。本当にありがとうございました。



## 海外派遣を終えて

桜橋中学校 久保 叶多

僕はオーストラリアに行く前には、とても緊張や不安がありました。しかし派遣生徒の皆さんと事前学習で仲が深まり、緊張や不安がだんだん薄れて、楽しみな気持ちやワクワクした気持ちが浮かんできました。ALTの先生方の授業では、オーストラリアについて深く学び、自分の英語がどこまで通用するのが分かり、さらにオーストラリアに行くことが楽しみになっていました。班の皆とシドニー視察のコースを決め、パワーポイントを使って調べて、自分がオーストラリアに行くという実感がわいてきました。

皆さんとたくさん準備をして、ついに8月5日に日本を離れました。オーストラリア派遣の初日でとても緊張していました。出発前は不安な気持ちが大きかったけれど、いざ飛行機に乗ってみると次第に安心し、これから始まるオーストラリア派遣に対しての期待でとてもワクワクしました。長期間のフライトもとても楽しくあつという間に終わり、ついにシドニーに着きました。空港を出ると早速シドニーの街並みが見えて興奮しました。バスでいろいろなところに行き、観光を楽しみました。アボリジニ学習センターでは、特殊な道具などを見ることができ、ブーメラン体験などをし、とても楽しかったです。

次の日から5泊6日のホームステイが始まりました。ホストファミリーの一家は、とても明るく、優しい人でした。僕がホームステイで思い出に残ったことは3つあります。第一に、森のようなところに家があったことです。車で家に帰るとき、すごい坂を下って家に行きます。森の中にあるので周りに光があまりなく、夜空がとてもきれいでした。第二に、家がとても広いことです。3階建てになっていてそのうちの1階をすべて貸してくれました。卓球台があり、シアタールームまであるすごく豪華で、大きい家でした。寝室にもテレビがあり、ネットフリックスなども見られました。第三に、夜の散歩やドライブです。夜の散歩では、雨がとても降り、雨の中を走り回ったり、ケバブを食べに行ったりしました。ドライブは少しでしたが、車ではなく、カートみたいなもので坂を上り、下って帰ってくるということをしました。安定感がなく何度も落ちかけましたが、それがとても楽しかったです。休日は海や山に連れて行ってくれました。山はとても高く、周りがよく見るととてもきれいな場所でした。海では、少し入ってきてもいいぞと言われ膝まで入りましたが、とても冷たく、長くは入れませんでした。砂浜を走ったり、砂に落書きをしたりなど、とても楽しかったです。

学校では、バディの人とたくさん話し、サッカーをしたりバスケットをしたりするなど、とても仲良くなり、終わった今でもメッセージのやり取りが続いています。授業も日本の学校とは真反対な感じ、自由さを感じ、とても楽しかったです。校内も校庭もとても広く、迷子になったりバディの人を見失ったりなどハプニングなどもたくさんありました。肝心の英語はというと、自分が思っていたよりも通じました。向こうの人が皆フレンドリーで握手し、騒いで、自然と親しい仲が作れました。そんな楽しい日々も長くは続かず学校から離れるフェアウェルパーティーを行いました。始まる前はとても緊張していたけど、バディの人や、仲良くなったひとから「good luck」と応援の言葉をかけてもらい、うれしかったです。いざ始まると緊張も消え、終わった後自然と笑顔になっていました。ホストファミリーにも感謝をし、シドニーに帰ってきました。シドニー視察でも班の人ととても仲良くシドニーを歩きまわり、とても思い出に残りました。今回のオーストラリア派遣を通して、言葉や文化の違いに戸惑うこともあったけど、それ以上に新しい発見や学びが多く、自分の成長を実感することができました。現地で出会った人々の温かさや、挑戦することの大切さを知り、自分の視野を広げる貴重な体験になりました。これからも今回の経験を忘れずに、積極的に新しいことに挑戦していきたいです。

## やってみないと分からない

桜橋中学校 高橋 あぐみ

私は、結果が出ないとやっても意味がないと思ってしまい、いつも途中で諦めてしまいます。そんな自分を変えたいと思い、この海外派遣に参加しました。はじめは参加理由がそれだけでしたが、事前学習に取り組むごとに学びに行きたいことが増えていきました。私はオーストラリアに着いてから、「まずは喋ってみる」ことを学びました。Pittwater High School ではとても緊張していて、バディの子とうまくやれていけるかすごく心配でした。だからこそ沢山質問をしたり、分からないことがあったら口に出したりして、できるだけコミュニケーションを取るようにしました。するとバディの子との話す回数が増えていったのでとても嬉しかったです。私は、英語を完璧に話すことができないと海外に行くのは難しいのではないかと思っていました。しかし、その考え方は違い、完璧でなくてもまずは喰らいついでみることを実際に経験し、学ぶことができました。

ホームステイ先の方々は毎日色々な場所に連れて行ってくれました。そのため、オーストラリアがどのような場所なのかを肌で感じる事が出来ました。さらに行った場所の説明を毎回してくれてとても楽しかったです。ホームステイ1日目の夜ご飯が、私には少し量が多く、残してしまいましたが、「必要なものだけ食べてね」と言ってくれてとても嬉しかったです。私たちに言葉が通じないときは、翻訳アプリを使うなどしてたくさんコミュニケーションをとってくれました。そのおかげで、たくさん英語に触れることができました。

Pittwater High School やホームステイ先では日本と違う、その場の雰囲気などで話すことが最初は難しかったですが、一日の終わりに次どうしたらいいかななどと、一日の経験を振り返りながら生活することで、「今日は昨日より多く話せた」と自分の中で成長を感じる事が出来ました。

授業体験最後の日には、もう最後なのかと思うほどあっという間に感じました。バディの子やその周りの子と話していると、初日のおどおどしていた自分とは全然違うと思い、少しでも成長を感じる事ができて嬉しかったです。そしてフェアウェルパーティーでは、練習してきた歌やソーラン節を披露しました。この一回に全ての気持ちを込めようと思いながら披露したので、練習での声量以上の声を出して披露することができました。ホームステイ先の方々にお土産を渡すときも感謝の気持ちでいっぱいでした。ホストファミリーと一緒にいたのは、たったの5日間だったけど、別れるのが寂しくてあともう1日だけ泊まりたいと思うほどでした。

この10日間で学んだことは、初めての試みでも怖がらないことです。慣れない環境での生活はつらいことも不安なこともありました。ですが、その中には喜びや楽しさがあり、「やってみないと分からない」を実際に経験しました。失敗することが怖くて何もしないより、小さいことでも何か行動してみると少し変わるということが分かったので、これからは失敗を恐れずに「チャレンジしてみる」を大切にしていきたいです。



## オーストラリアで学んだこと

桜橋中学校 達 彩葉



私たちは約一週間日本を離れ、オーストラリアに行きました。私はオーストラリアに行く前にある目標を立てました。それは「自分から話しかけ、オーストラリアや話した人のことを知る」ということです。これを完璧には達成できなかったけれど、目標があったからこそ学べることができました。

第一に、言語についてです。短い間でしたが言語の違いに悩まされる場面が多々ありました。言語の違いについては、オーストラリアに行く前からすごく不安な点でした。飛行機に乗り何を頼むときでさえ苦労したのに、ホストファミリーやバディとやっていけるのかと。学校に着いて自己紹介するとき、とても緊張しましたが、身振り手振りで伝えたり、自分のわかる単語を組み合わせたりして話すことができ安心しました。しかしバディがなにかを聞いてくれるのに、それに対する返答が返せませんでした。このとき、自分の英語力のなさに失望しました。それがとても心残りなので「自分の言葉を自分で伝えられる」ように英語力を上げていきたいと思いました。

第二に、文化についてです。文化が違うのは当たり前ですが、日本とは違う環境で驚きました。特に学校での生活で感じました。2時間目と3時間目の間にモーニングティーという時間があったり、9教科だけではなくたくさんの授業を受けたりと、違うところがたくさんありました。他にも、ホストファミリーとの生活では初対面なのに会話が軽く驚きましたが、とてもうれしかったです。お互いの文化に違いはたくさんありますが、それぞれの文化を尊重、理解し大事にしていきたいと思いました。

第三に、様々な国の人がいることです。学校やシドニー市内では国の違う人同士が仲良く話をしていて驚きました。ランチやおやつは自分の国のものを食べていることが多く、生まれた国を大切にしているところが見られました。自分の国を大切にしているからこそ、ほかの国の文化も大切にしていると思いま



した。私も学校で生活しているときに日本語であいさつしてくれてうれしかったです。この環境は私たちにとっては驚くことオーストラリアの人たちにとってはそれが普通のことなのです。日本でもこのような姿が普通になっていくとよいと思いました。

私はオーストラリアに行って、たくさんの貴重な経験をさせてもらいました。不安だったり困ったりすることはたくさんあったけれど、どれもいい宝物です。私の目標は「自分から話しかけ、オーストラリアや話したことの人について知る」でした。会話に必要なのは言葉ですが、私は英語を完璧には話せません。けれど、身振り手振りを使い、会話をするということが学ぶことができました。しかし、「英語力がこんなにもなかったのか」と思い知らされました。自分の話したいことを話せるように、英語や海外についてもっと学習していきたいと思います。今回の体験で学んだことを学校の学習だけではなく普段の生活の中でも生かしていきたいです。

## オーストラリアでの経験

桜橋中学校 長谷川 晃之助

私は、初めての海外でオーストラリアに行く前はとても不安でした。しかし、派遣生徒とともに事前学習を受講するにつれ、徐々に不安が無くなっていきました。事前学習では、ALTの熱心な英会話学習のおかげで、英語でコミュニケーションが取れるようになりました。派遣生徒が協力してソーラン節を練習し、掛け声や振り付けを、皆で工夫して踊れるようになり、チームワークが高まりました。たくさん準備をして、8月5日、日本を出て、オーストラリアへ向かいました。

初日はアボリジニ文化センターに行きました。アボリジニの伝統や文化が日本とどのように違いがあるか、興味をもっていました。アボリジニ文化センターには、自然の植物や果物がたくさんあり、印象に残った植物はユーカリで、とても燃えやすく木の中に油が入っていて、森林火災の原因になるそうです。アボリジニの伝統的な道具もあります。それは、ブーメランです。儀式やスポーツで使われ、戻ってくるものこないものの二種類があります。戻ってくるブーメランは、投げると手元に戻ってきて、スポーツや遊びに使われています。戻ってこないブーメランは、昔アボリジニが狩りや戦闘で使用していました。他にも、日本の文化とアボリジニの生活の仕方や物の使い方の違いを学びました。学校でもアボリジニの文化や伝統を伝えたいです。

翌日からは、5泊6日のホームステイが始まりました。ホームステイを体験する前は、不安がありましたが私のホームステイ先のテイラー家はとても素敵な家族でした。テイラー家の生活で思い出に残っていることが四つあります。第一に、テイラー家に肉じゃがを作ってもらったことです。私は、肉じゃがの作り方を海外派遣に行く前お母さんに習い、はじめて肉じゃがを作るときは、煮込み具合や水の分量の調整などが難しく、とても苦戦しました。しかし、肉じゃがの材料の数や量を確認し、計画的に調理ができるようになりました。また、ホームステイ先のお父さんにエビのむき方やハンバーガーの作り方を教えてもらったので、日常生活で活用していきたいです。第二に、ホストファミリーとスーパーマーケットに行ったことです。私は、スーパーマーケットに行って驚いたことがありました。それは、水の価格です。オーストラリアの水の価格は、日本円にすると230～470円で、日本に比べてとても高いです。オーストラリアの国土の大部分は乾燥地帯で、水がとても貴重であるためです。日本では水を当たり前で使うことができ、恵まれていると思いました。これからは、水を大切に使い、生活していきたいです。第三に、ホストファミリーと映画館に行ったことです。映画館内では、ポップコーンがたくさんあり、種類も多かったです。そのなかでも、一番驚いたことは、飲み物が売っているところに、シャーベットのジュースが売られていたことです。日本の映画館では、シャーベットのジュースが売られていないのでとても驚きました。また、シャーベットのジュースを注ぐとき、蛇口が使われていて日本との違いが分かりました。第四に、フェリーに乗ったことです。フェリーに乗ると、オペラハウスやハーバーブリッジがみえ、絶景スポットでした。また、涼しい風にあたりながらフェリーに乗ることができ、最高な5泊6日と感じました。

ホームステイ中は現地の学校に通いました。学校に行く前は、生徒とコミュニケーションをとれるか心配だったけれど、生徒は優しく声をかけてくれて、とても安心して学校生活を送ることができました。学校生活を送って、印象に残っていることがあります。それは、テニス、サッカー、バスケットボールを生徒としたことです。学校には、テニスコートやバスケットボール、サッカーをすることができ、とても楽しく、有意義に使えました。また、日本にくらべて、校庭が広いと分かりました。

この海外派遣で学んだことは、何事にもチャレンジすることです。ぼくは、海外派遣に参加する前はチャレンジすることをこわがり、逃げていました。しかし、この海外派遣で何事にもチャレンジするようになり、この海外派遣は僕にとって、力がついた10日間でした。

## 短期海外留学派遣

駒形中学校 江端 一翔

私は、この中学生海外短期留学派遣を通してとてもよい体験をし、忘れられない思い出を作りました。派遣が決まって一番初めにあったのが台東区役所で行われた結団式です、厳かな雰囲気でもとても緊張しました、これから解団式まで学習をしていく仲間達と出会い、いろいろなことを思いました、研修を重ねるうちにいろいろな人と仲がよくなり交流を深めることができました。事前学習のソーラン節の練習では筋肉痛になりながらも頑張りました。ALTの先生に来ていただいた授業では苦手な英語を相手に上手く伝えられるように工夫をしました。ある研修のあとミーティングの時に上野中学校長から「どの国でも共通のコミュニケーションはなんだろう」と、質問されました。最初自分は挨拶だと思いました、でも校長先生が言うには【笑顔】だそうです。この話をきっかけに笑顔を大事にしようと思いました。

オーストラリアに着き、最初にアボリジニ文化センターに行きました。そこでは煙を被る儀式や広島の原因被災者への黙祷をしました。その後は室内に入りいろいろな道具を触ったり、フェイスペイントやブーメラン作りなどの体験をしたりしました。

次の日には現地の学校に行って授業体験、ホームステイが始まりました。授業では選択制の授業や必修科目などがありました、自分のバディの子は7年生（日本の中学一年生）だったので選択制の授業がありませんでした。しかし、バディの子が風邪で休んでしまい9年生の人がバディのかわりになりました。9年生はほとんど選択制の授業なので実技系の授業を取っていました。自分は音楽の授業を体験したときにとっても驚いたことがあります。日本の音楽の授業では歌を歌うことや鑑賞などをしてはいますが、現地の学校では作曲をしたり、各自がブラスバンドなどで演奏している楽器を出して演奏する曲の練習などをしたりしていました。

また、メディアという授業では、教室に置いてあるカメラなどをもって授業中に校内を歩いていろいろな写真を撮りにいきました。授業の科目ごとに教室が違うので、毎授業違う教室に移動していました。中でも日本の学校とはまったく違うことがあり、驚いたことがありました。それは、スナックタイムという時間があり、2時間目と3時間目の間にある時間に空腹を満たしました。

ホームステイ先では、お父さんが優しく家で出迎えてくれました。ホームステイ先で使う部屋へ案内してもらった時にベッドの上に水筒とチョコがギフトとして置いてありました、日本ではあまりない光景なので文化の違いを感じました、ホームステイ一日目の夜ご飯にミートパイが出てとても美味しかったです。ホームステイ先の家はとても広く庭にプールやトランポリンなどがありました。二日目の夜はバディの兄が友達を呼んで、お父さんが家にあるピザを焼く機械でピザを焼いてくれました。休日には家で映画を見たり、オペラハウスやいろいろなビーチに連れて行ってもらったりしました。また、そこでお土産などを買いました。いろいろなところを観光してとても楽しい週末を過ごすことができました。ホームステイ先では、日本のお土産を渡したときにとっても喜んでくださり、お土産をすぐに使ってくれていました。学校の時には、毎朝お父さんが起こしに部屋へ来てくれました。朝食は、シリアルやワッフルなどを食べて毎日元気よく学校に行きました。ホームステイ先でも笑顔を忘れることなく、ホストファミリーと楽しく会話をすることができました。バディの子やホストファミリーの人と連絡先を交換しました。これからもホストファミリーやバディの子との交流を続けていきたいです。この中学生海外短期留学派遣を通して、荷物の準備を手伝ってくれた親、引率の先生、ホームステイを受け入れてくれたホストファミリーの方々に、とても感謝をしています。

## オーストラリア海外派遣を通して

駒形中学校 神吉 陸杜

私たちは、この短期海外派遣のためにこれまで幾度も事前学習をしてきました。そこでは、現地のパーティーで日本の伝統的な踊りとして踊る「ソーラン節」や、現地の人との会話に向けての英会話のレッスンなどをしました。大変でしたが、今では大切な思い出の一部となっています。行きの飛行機の中では、現地でちゃんと会話ができるのか、シドニーはいったいどんなところなのか、不安と興奮が入り混じった気持ちになっていました。いざシドニーに着くと、不安な気持ちは「なるべく多く現地の人と会話するぞ」といった自分を奮い立たせる気持ちに変わっていました。私たちはまず、アボリジニの文化センターへ行き、煙を体に浴びる儀式や日本の広島に向けて黙祷をささげました。そこでは先住民の文化を肌で感じることができました。次の日、私たちは初めて現地の学校に行きました。最初に歓迎会を行い、となりのトトロの「さんぽ」を歌った後、バディと一緒に授業を受けました。全てが英語なので、現地の生徒と同じ学習をすることはできませんでしたが、バディの人に「分からなかったら聞くだけでもいいよ」と言われたので、私は極力バディの人に何と言ったのかを尋ねたり、単語の意味について調べたりしながら授業を受けました。どうしても内容が分からなかった時は、授業の中で話されている英語をなるべく多く聞き取るようにしました。現地の学校では、ランチの時間が二度設けられていました。

私は、バディと一緒に校庭でランチを食べました。すると、他の現地の生徒が近寄ってきて、「What's your name?」など、様々な質問をされました。私は、そんな生徒たちの異国の人に対して積極的にコミュニケーションをとる姿に感銘を受けました。学校が終わった後、私はホストファミリーの方々と初めて対面しました。家の構造を教えてもらった後、私たちが過ごす部屋が割り振られました。ホストファミリーの方々はとても親切でした。ホームステイ先での生活は、日本とは全く違うものでした。まず、靴を脱いで部屋に入るといいう習慣がないので、私は基本スリッパを履いて過ごしました。次に、食事のあいさつがないので、食事の時は料理が運ばれたら各々食べ始めるし、食べ終わったら自分の食器を持ってシンクに置くということが普通でした。このような文化の違いに慣れるまで、かなりの時間を要しました。ホストファミリーの方々は、私たちをいろいろな場所へ連れて行ってもらいました。例えば、休日にオペラハウスやハーバーブリッジに連れて行ってもらいました。今後の人生に於いて二度と味わえないような経験でした。それ以外にも、天候が悪かったものの、ビーチへ行って近くのカフェでブラウニーを食べました。ホストファミリーの方々は私たちに非常によく接してくれました。今でも感謝してもしきれません。フェアウェルパーティーでは、そんなホストファミリーや現地の学校の生徒たちに恩返しする気持ちで合唱とソーラン節を全力でやり切りました。また、リハーサルで不安な部分を洗い出し、そこを意識することで自分の練習の成果を最大限発揮することができました。特にソーラン節では重心や一つ一つの動作に気を付け、現地の人たちに向けて迫力ある演技ができました。パーティーが



終わった後、私は現地の人々にお礼を言って学校を出ました。彼らには、もう会えません。その時私は初めて親族以外で心から「また会いたい」と思いました。このオーストラリアの短期海外派遣で、私はホームステイや現地の学校に訪問するなど、日本では味わえないような様々な経験を数多くすることができました。オーストラリアの日本とは違う文化や価値観を感じ取り、さらには英語力の向上にもつながりました。この派遣で得たとても貴重な経験を今後の人生に必ず生かしたいと思います。

## 「忘れ得ぬ人々との出会い、オーストラリア」

上野中学校長 矢部 直意

令和7年度、台東区中学生海外短期留学派遣事業により代表生徒20名は、昨年に引き続き、オーストラリア・ノーザンビーチ市並びにシドニー市において短期留学を行いました。本事業は2年目を迎え、国際理解教育を推進するうえで大変意義深い取り組みとなりました。

ノーザンビーチ市とは、日本美術展を契機に交流が始まり、相互の異文化理解を目指して姉妹都市提携を結んでおります。そのご縁を通じ、本区代表生徒20名は現地校ピットウオーターハイスクール訪問やホームステイ、文化交流活動など、多彩な学びを得る機会に恵まれました。

事前学習では、語学研修や各役割分担に加え、日本文化を紹介する準備を進めました。合唱練習では最終的に生徒で振り付けを考え、披露しました。相手校の校長先生は、さらにパワーアップしたソーラン節も楽しみにされていて、「本校ではあのように指導できない」とお褒めの言葉をいただきました。私と懇談する時間も取ってくださり、それぞれの教育課題を話し合い、それらを最終日にご紹介いただいたのも印象的でした。



現地到着時、飛行機を降りた生徒たちを迎えたのは、眩しいほどに輝くオーストラリア特有の日差しでした。アボリジニ文化の体験やオペラハウスをはじめとするシドニー市内の散策、そして最終日の班別行動は、生徒一人ひとりにとって忘れられない貴重な経験となりました。

また、滞在を支えてくださったホストファミリーの方々は、生徒を自分の子どものように大切に迎えてくださり、別れのフェアウェルパーティーでは、家族同様に過ごした温かい絆が感じられました。派遣生徒たちとホストファミリーとの距離が近付き、生活そのものを楽しんでいる様子が伺えたことは、派遣事業の大きな成果です。

今回の留学で得られた学びや交流の経験は、これからの学校生活や地域活動の中で必ず生かされるものと確信しております。各自が自らの立場で、その成果を周囲に広げ、さらなる成長を遂げてくれることを大いに期待いたします。

最後に、この事業を実現するにあたり多大なるご尽力を賜りました台東区教育委員会関係者の皆様、受け入れてくださった現地校並びにアリソン・ガンビノ校長先生、温かく迎えてくださったホストファミリー、そして日頃から生徒を支えてくださる保護者・地域の皆様に心より感謝申し上げます、報告といたします。

## 「英語という言語を通して」

柏葉中学校 主任教諭 島田 裕也

現地の授業を受け、生活することは生徒にとって貴重な経験である。今回の派遣は語学を主体とするのではなく、異文化に飛び込むことで実際の生活様式をそのまま体験するという、貴重な経験ができることに感銘を受けた。中学生にとって、英語を使うことが目的ではなく、違う文化圏で生活する人との交流をするためのコミュニケーションの方法としての言語が英語であることへの気付きが大きな学習の成果である。また現地での生活では、常に行動を共にしてくれるバディが気持ちよく迎えてくれたことにオーストラリアの懐の深さが表れていた。今後、日本にも多くの外国人が生活を共にしていくようになる未来を想像していくと、この研修で体験したことを、単純な留学ではなく、日常生活に飛び込んでくる海外からの転校生への関わりに、今回参加した生徒がリーダーシップを発揮し、他の生徒を巻き込んでいけるような人材になることを、切に願ってこの研修の報告とする。

## 「挑戦と体験から得られたもの」

桜橋中学校 教諭 天谷 優里

シドニー空港に降り立った時に感じた冷たい空気、北の空に昇る太陽や月、南十字星、飛行機の窓から見た流れ星、朝日。自然から南半球に来たことを実感できた旅でした。色彩豊かで人に慣れた鳥たちの姿も新鮮でした。私自身初めての海外であり、引率する立場ではありましたが、派遣生徒の皆さんと同様の期待や緊張、そして感謝の思いを抱いた10日間でした。

体験に勝るものはない。その言葉がぴったりの派遣生活でした。結団式から約1ヶ月半、何時間もかけて事前学習として英会話やオーストラリアの知識を学びました。知識以上に、日本との違いを感じ、オーストラリアでの生活はどの場面にも発見がありました。慣れない海外生活、英語しか使えないホームステイや授業体験。英会話の練習をしたのに、自己紹介や相手に質問するのも難しく、英語でうまく伝えられないもどかしさから落ち込むこともありました。そんな時に支えてくれたのは、オーストラリアの人々の気さくさ、朗らかさでした。Pittwater High School で出会ったバディ、先生、ホストファミリーのどの人々も、私たちを温かく迎え入れてくれました。こちらは拙い英会話でしたが、身振り手振りや表情からも互いの気持ちを通わせることができました。生徒の表情の変容が忘れられません。初対面では緊張や不安をはらんだ表情だったのが、フェアウェルパーティーでは抱き合い、涙を流し、別れを惜しんでいました。どの生徒も良い表情を浮かべており、特別で宝物のような時間を過ごさせてもらったことが伝わりました。また、生徒の柔軟さ、コミュニケーションを諦めずに挑戦する気持ちが育ったからこそ、この瞬間が生まれたのだと思います。

今回の海外派遣は多くの方々のお力添えにより、無事に終えることができました。これをきっかけに日本と海外を繋ぐ架け橋になり、明るい国際社会を築く人材が育つことを願っています。行動した先にある未知の世界を手に入れるために、勇気を出して一歩踏み出せる人になってほしいです。本活動を通して生徒の挑戦する姿を支えてくださった全ての皆様に感謝をしています。台東区から世界を支える子どもを育成できるよう、本事業の益々の発展を祈念しています。

## 「引率を通して」

上野中学校 教諭 多久 優麗花

生徒たちは、ホームステイ本番に向けて約1か月前から顔を合わせ、オーストラリアについて知識を深め、英語でのコミュニケーションを練習してきました。その事前学習の様子から、20人それぞれがこの短期留学に違った動機や目的をもって臨んでいるのだと感じました。実際に現地で初めて会うホストファミリーのもとで英語というコミュニケーション手段を使って6日間の経験をしました。この特別な経験で、生徒たちはおそらく一日ごとにたくさんの感情や気付き、自分の成長を感じられたと思います。そして、ホームステイ終了後には、最初に掲げていたものとは違った目標が芽生えたはずで、どうか、その目標やモチベーションが一過性のもので終わらずに長く持ち続け、今回の派遣留学を大きな価値あるものにしてほしいです。

私自身は、この海外滞在を通して日本の良さを改めて知ることができました。海外のスポーツ観戦の後、会場のゴミ拾いをする日本人が称賛されるように、公共物をきれいに保とうとすることなど、日本人として当たり前のマナーだと思っていることは、実は海外ではそうではないということに気付かされました。学校教育で行っている道德の授業もマナーの定着に一定の意味を与えているのと思います。このことから専門教科と並行して道德教育もより一層力を注いでいこうという思いが強まりました。

## 「肌で感じた 貴重な経験」

台東区教育委員会指導課 指導主事 山田 智裕

オーストラリアの地で、異なる文化や習慣に触れたことは、生徒一人一人にとって、まさに「肌で感じる」貴重な学びの機会となりました。6月の結団式から始まった事前学習、現地での研修、そして帰国後の事後学習を通じて、派遣教員と生徒たちの間には、自然とチームとしての一体感が育まれていったように感じています。

インターネットや書籍から得る知識も大切ですが、やはり実際に現地で体験することに勝る学びはありません。派遣生徒たちは、それぞれが本当にかげがえのない経験を重ねる中で、自らの新たな可能性を見出し、自分自身の成長を前向きに受け止めている様子が印象的でした。

実際に、英語に不安を抱き、コミュニケーションに苦手意識をもっていた生徒が、現地ではジェスチャーを交えながら、片言の英語で積極的に話しかける姿がありました。その姿勢は現地の生徒たちにも温かく受け入れられ、良好な関係が築かれていきました。臆することなくチャレンジすることで得られる成果の大きさを、私自身も改めて実感することができました。

共に過ごした派遣生徒の皆さん、引率の先生方、そしてアテンドをしてくださったワールド航空の上原さん、本当にありがとうございました。皆さんと過ごした時間は、私にとってもかけがえのない思い出となりました。

また、現地ではガイドの方をはじめ、ピットウォーターハイスクールの校長先生や教職員の皆様にご世話になりました。温かく迎え入れてくださったことに、心より感謝申し上げます。

最後になりますが、指導主事の諸先輩方のご助言をはじめ、引率の先生方を含む多くの国内外の関係者の皆様のご尽力により、本事業を無事に終わることができました。今年度の経験と改善点を今後に生かし、さらに充実した学びの場となるよう、本事業が今後も継続・発展していくことを心より願っております。

## あとがきによせて

台東区教育委員会指導課長 宮脇 隆

8月14日（木）、羽田空港で再会した派遣生徒たちは、どこか名残惜しさをにじませながらも、達成感に満ちた表情を見せてくれました。そのような姿から、彼らがこの研修で得た充実した経験と深い学びが伝わってきました。あの瞬間の輝きは、今も心に残っています。

派遣生徒は、書類審査と面接を経て各校から選出された20名です。6月21日（土）には、教育長をはじめ教育委員会関係者、保護者の皆様の御臨席の下、結団式とオリエンテーションが行われ、事前学習がスタートしました。

事前学習では、上野中学校と桜橋中学校を会場に、ALTによる英会話講習やオーストラリアの文化・生活などについての学習を行ってきました。また、シドニーのクリア事務所とオンラインでつながり、現地在住の日本人の方から生の声を聞く機会も得ました。研修が進むにつれ、生徒同士や引率の先生方との関係が深まり、派遣団としての一体感が育まれていく様子が印象的でした。出発式での生徒のあいさつには、オーストラリアでの研修に向けた強い意欲と期待にあふれていました。

現地では、ホームステイと学校生活を中心に、かけがえのない10日間を過ごしました。派遣期間中の生徒たちの様子は、グローバル教育重点指定校である上野中学校・桜橋中学校のホームページにほぼ毎日掲載され、授業体験やホストファミリーとの交流など、充実した日々が伝えられていました。

この海外派遣研修は、生徒一人一人にとって、一生心に残る経験となりました。解団式で代表生徒は、次のように述べています。「言語の違う人とのコミュニケーションをとってみて、視野が以前よりも広くなったと思います。相手が今どう思っているか、今何をすべきかなどを自分で考えなければいけない場面が多かったからです。また、自分の英語力がまだまだだということを実感しました。もっと話したい、仲を深めたいと思うことが多々あり、悔しさとともに新たな課題を発見した喜びも感じました。広い視野を持ったリーダーになることと、語学力を向上させることを私は今後の学校生活で意識したいと思います。」異なる文化や言語の中で過ごした時間は、生徒たちの将来の進路や生き方に大きな影響を与える貴重な学びの機会となったことが分かります。生徒の皆さんには、今回得た経験と自信を、これからの人生に生かしてほしいと願っています。

また、広報課の協力の下、結団式から解団式までの様子が14分間の動画にまとめていただきました。なお、現地での様子については、派遣生徒や引率の先生方が記録してきた写真や映像を素材として活用しています。

最後になりますが、本事業の実施にあたり、温かい御支援と御協力を賜りましたニューサウスウェールズ州教育省の皆様、ピットウォータースクールの校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝申し上げます。また、派遣生徒の育成に御尽力いただいた区内中学校の校長先生方、引率の先生方、そして日々支えてくださった保護者の皆様にも、深く御礼申し上げます。

令和7年度  
台東区中学生海外短期留学派遣報告書

発行 令和8年1月発行  
発行者 台東区教育委員会指導課  
〒110-8615  
台東区東上野4丁目5番6号  
電話 03-5246-1453